

旧東川駅跡再開発プロジェクトについて

	意見、質問等	町からの回答/今後の対応
開発の 方向性	静かな場所で暮らしたくて東川町へ来たが、町が整備されていることもある一面、賑やかに なり過ぎると静かな町ではなくなってしまう心配もある。	今回のプロジェクトにより、静かな東川町が変わってしまうのではないかとの声が、他のタウンミーティングでも寄せられています。 町としては、現状の魅力を守りながら人口を維持するためには、この事業に限らず経済振興やさまざまな工夫が必要と考えています。 経済を活性化させるには、一定の人口が不可欠であり、観光振興も含めた経済循環を保つことが町を守ることに繋がります。 もちろん、オーバーツーリズムへの懸念は理解しており、最初の構想段階からバランスを意識した検討が必要と考えます。
	何でも新しい物をつくる発想には疑問がある。「経済が回らないから作る」という考え方に なっているのではない。 バスは1時間に1本で不便利だが、その不便さが楽しめる環境でもある。この環境は絶対に 失ってほしくない。京都のようなオーバーツーリズムにならずに、少し不便な町歩き環境のほう がよい。 郷土館・せんとびゅう・道草館・倉庫群などを改造することは理解できる。新しく建てるのでは なく、既存施設を改良・連携させ、町歩きを促すことで高齢者や住民の健康増進にもつな がる。 この3年間の協議の中で、新築反対の職員はいなかったのか。原点に立ち返り、現プロジェ クトに加えて新しい視点を考えてほしい。	建物を建てるのが目的ではなく、東川町の将来に向けて住みやすさや調和を崩さない持続可能なまちづくりが重要です。 30年前と比べ、移住者も増えた現在の町は高く評価されていますが、その持続には経済的な豊かさが必要だと考えます。家具産業は 建築資材高騰の影響で厳しい状況にあり、国の補助金を活用して振興を進めていて、織田コレクションはその一助となり得ると思いま す。 農業を基幹産業とした歴史的に誇るべき場所をいかに守っていくか、そのための新たな施設整備への理解いただきたい。集客と同時に、 住民や子どもたちが関わりが持てる、何を大事にする場所にすべきかを検討していきます。
	駅前再開発は、町民向けというより観光客受け入れを目的とした要素が強いと感じてい る。東川はもともと農業が基盤としてしっかりしており、ライスセンターや田んぼの大型化により 将来の農業の見通しは立っている。 駅前再開発では観光に重点が置かれている印象があり、その観光軸の将来像が東川の まちづくりとどのように結びつくのか現時点では分かりにくい。現状の展望を可能な範囲で知り たい。	本プロジェクトの基本理念（資料19ページ）では、観光施設ではなく、町民が訪れたいくなる大切な場所とすることが根幹に据えられて います。観光客向けの整備が進められているように見えるとのご指摘もありますが、あくまで町民が交流し、誇りを持てる空間づくりが出発 点です。ただし、運営の持続性を考慮する上では、観光や外部からの訪問者も必要であり、地元と外とのバランスを意識した整備が必要 となります。 レンガ倉庫の多目的活用についても検討が進められています。音楽や演劇、展示、セミナーなど、町民や子どもたち、高齢者も活用で きる自由な表現と交流の場として、居場所づくりと連携する可能性があります。町の歴史や文化、教育に根差した「東川らしさ」を大切 にしながら、誰にとっても親しみやすい施設の実現を目指しています。
	もとは織田コレクションを展示する美術館を整備する趣旨の事業であったと認識してい ますが、どのような経緯でプロジェクトの趣旨が変わったのか。	「旧東川駅跡再開発プロジェクト」の構想の名称は町長就任後に具体化し、それ以前の「東川発KAGUデザインミュージアム構想」に は明確な計画や図面はありませんでした。織田コレクションの公有化を受けてその価値を活かすべきと判断し、レンガ倉庫の歴史的・産 業的意義を踏まえるため、2年間の調査を行った結果として、「旧東川駅跡再開発プロジェクト」という総合的な名称を用い、その中で 織田コレクションを活かすことを計画しています。
事業の ねらい	令和5年度までは「デザインミュージアム」構想として進められていたものが、今回「旧駅倉 開発プロジェクト」へと変わった。名称は目的を定義する重要な要素であり、従来はデザイン を町おこしに活用し、特に世界的価値を持つ織田コレクションを文化として醸成していく議論 がなされていた。 名称変更により、駅舎開発そのものが目的達成とみなされ、本来の文化的デザインの意義 が薄れるのではないかと懸念している。世界的に見ても日本にはデザインミュージアムが存在 せず、その状況を危惧した織田氏が寄付を行い再開発の土壌が整っている中で、タイトルが 変わってしまっている。	・KAGUデザインミュージアムの名称変更について、3年前は織田コレクションを中心に据えていたが、現在は「デザインミュージアム」とい う形が全てではないと考えている。 ・織田コレクションの価値は十分に認識しており、外部からは高く評価されている一方、まずは町民の皆さんと価値を共有することから始 めることが適切と考えています。
	第三地域には、形としては見えにくい根付いた文化が存在する。町民運動会では3つの カップを獲得し、遠方の大学に通う若者も東京から戻って参加するほどの情熱がある。移住 者との交流でも、「なんとなく良い」という理由で東川を選ぶ感覚自体が文化といえる。 目に見えない文化も発信対象にすべきであり、各地域の固有文化を幅広く伝えることが重 要。体験の家は本線に移設され予約で満杯、地域を一定期間見学してから再び戻ってくる 人も多い。農業・観光・商業など全分野を平均的に発信できる体制が望ましいと考える。	昭和47年に廃線となった電車の記憶は、今の50代後半が覚えていてる程度であり、それ以下の世代にとっては東川に電車があった歴 史すら知らない場合もあります。地域の歴史や文化を継承し、町の記憶を風化させない工夫が必要です。 また、東川町の魅力は特定の要素に限定されず、自然や人、雰囲気といった日常の心地よさが移住の決め手となっており、今後のプロ ジェクトやまちづくりにおいても最も重要だと考えます。人々が長く暮らし続けられる場所として、東川町がおり続けることが最終的な答えで あると考えます。
	自身は上川町や旭川市、札幌、カナダなどで勤務経験がある中で、教育など計画し ていることはまちづくりが根幹であることを踏まえ、上川管内の多くの市町村の中で東川町が 果たすべき役割について伺いたい。	旭川市に隣接し、旭川空港から車で約10分、大雪山国立公園の玄関口として豊かな自然環境にも恵まれています。こうした立地 条件の良さを活かし、他の自治体では難しいような先進的な取り組みに積極的に挑戦してきました。地方創生交付金や地方推進交 付金も柔軟に活用し、行政の仕組みや事業の進め方においても独自性を発揮しています。 こうした姿勢が功を奏し、全国的に人口減少が進む中にあっても、東川町は人口が微増するという成果を上げています。まちの魅力や 暮らしやすさを総合的に高めたことが、多くの人の移住や定住につながっています。 今後も「東川らしさ」を大切にしながら、町の資源や強みを活かした持続可能なまちづくりを進め、上川地域全体のモデルとなるような役 割を果たしていきたいと考えています。
	施設建設の必要性は、どのような課題を背景として生じたのかを知りたい。特に「町の中心 部」につくる必要がある」というコンセプトに至る前段階の課題設定を確認したい。	東川町はこれまで人口減少を経験してきたからこそ、持続可能なまちを目指して工夫を重ね、今の豊かさと魅力を築いてきました。これ からも「過疎のまち」であり続けるためには、立ち止まることなく課題と向き合い、産業や経済を支える基盤づくりが必要です。農業、家具 産業、商業、製造業などの産業全体を持続可能な形で支え、町民の暮らしを守るための経済的な強さを育てていくことが、今後の東川 町にとって重要です。 また、天然峡温泉や旭岳温泉といった観光地との連携や、町内を巡る仕組みづくりも、観光の持続性を高める手段と考えています。生 活・文化・社会・経済が連動し、町民の暮らしや産業、観光がつながり合う形でプロジェクトを整理し、課題解決に向けた検討を今後も 進めていきます。
	町長から「家具プロジェクト」から「駅跡エリアプロジェクト」へ名称を変更した背景に触れた が、なぜその名称にしたのが理由を知りたい。 名称変更により、町民以上に織田コレクションの価値を理解している外部の人々にとって分 かりにくくなる懸念がある。現在の構想で実現しようとしている内容が、名称によってばやけた り、伝わりづらくなったりしないか。	「KAGUデザインミュージアム」という名称だけでは表現しきれないプロジェクトであり、駅跡再開発という場所を大事にする、子供から高 齢者まで町民に伝わる考えで見直しました。 東川町の魅力や暮らしが先にあり、そこで織田コレクションをどう活かすのかを考えて、この名称としました。名称は、将来的に整備される 施設の名称とは別であり、今後も継続して検討すべき事項です。
	駅を使ったことはないが、親世代は利用しており、町民として来訪者が増えることは嬉しい が、同時に町民の暮らしの幸せも大切にしたいとの思いが強い。特に旧倉庫の変化や町民 との関わりに注目しており、織田コレクションの施設について、素晴らしい場所でも、何度も訪 れたいくなるような体験型の仕掛けがあるか伺いたい。 どの年齢層を対象にしているのか。子ども連れで訪れる際の配慮にも関心があり、トイレの鍵 が子どもの手が届く位置にあるため、安全面の改善（鍵の二重設置など）を望む。設計士 だけでなく空間デザインの専門家の意見も取り入れてほしい。	私自身、東川生まれで、3人の子どもを育てる親として、旧東川駅の記憶を大切にしています。祖母と電車に乗った思い出や、親から 聞いた上の世代の想いは、町の歴史として残していきたいと強く感じています。 旧駅周辺の整備にあたっては、観光客の誘致や収益性だけでなく、町民が家族と訪れて満足できる場所にするのが何よりも大切で す。「町民が大切に思える場所」であることが、この取り組みの原点であり、この考え方は懇談会やタウンミーティングでも多くの方と共有さ れており、同じ思いを持つ声が集まっています。町としてもこの想いを、今後の検討に反映させてまいります。

	意見、質問等	町からの回答/今後の対応
集客に向けた方策	棟賃しのコテージが増え、入口機能を果たしている。「青空テラス」や犬同伴可のコテージ「ルリアン」のHPを制作。PRには周辺の水田風景を活用し、これを目的に訪れる客が多い。季節ごとに変化する水田風景が町の大きな財産。真冬でも景観が集客要因となっている。季節や景色の変化を観光にさらに活かす工夫が必要。有識者の意見を取り入れ、右側エリア（景観要素）に変化を持たせる企画を検討してほしい。	今後もこうした意見をいただきたいと思います。前日の懇談会やワークショップは説明が中心でしたが、導入段階が始まり、これから本格的な意見交換が進みます。タウンミーティングを意見交換の場として使っていただき、その他の色々な方に伝えていただくことをお願いしたいです。後で何かあれば色々ご意見をいただければと思います。
	電車をコンセプトにした点が興味深い。どのような要素を集客要素と捉えているのか。	人が集まる場所のあり方には多様な考えがあります。現在の調査資料は、今後の検討のための過程であり、あくまでも参考としてご理解ください。たとえば、世界的な価値を持つ織田コレクションについては、専門家からも高い評価を受けており、町外からの関心層呼び込む力があると考えています。また、電車の展示についても、見せ方次第で大きなコンテンツになるとの助言を得ています。物販については、東川らしさに合致しないアイデアは却下しており、家具・クラフト・農産物・スイーツなど、道の駅とのバランスを考えた展開を検討中です。写真をはじめとする東川の文化も大切にしながら、町民が訪れたいくなる場所にすることが重要です。ただ集客を目的とするのではなく、地域の誇りと喜びを感じられる場を目指します。
	「適疎」が東川の魅力ですが、既存の施設やイベントですでに十分集客できているように感じます。本当にこれ以上集客することが大事なのでしょうか。どこまで集客を目標にされているのでしょうか。	東川町の魅力と持続可能性を守るためには、観光誘致やインバウンドの拡大だけでなく、駅跡の活用は、町民が誇りを持ち、訪れたいくなる場所づくりを優先するべきです。それが、急激な人口増加を目指すのではなく、「今の人口を維持すること」が東川町らしい豊かさにつながるかと考えています。適疎という考え方を踏まえ、今の人口を維持していける環境をつくっていけば、持続可能なまちとして住んでいる方が豊かに暮らし続けられるのではと考えております。その中で、一定の経済活動、教育や福祉、人材、関係人口との交流など必要と考えます。・現在、持続可能な町をつくれるかどうかの瀬戸際にきており、旧東川駅跡の整備は、今後の町の方向性を示す大きな節目となります。この場所をどう生かすかが、町の魅力や住みやすさを含めた適疎な町になると考え、検討を進めています。
既存公共施設とのすみわけ	現在の開発計画の原案（22ページ参照）を見ると、既に町内に充足している機能や施設がさらに増えるだけではないかという印象を持っている。東川町は人口増加もあり、町の魅力が十分に伝わっているため、新たに似たような施設やサービスを増やすことは逆効果になる可能性がある。道の駅が盛況で地域住民の交流の場となっている中、同様の機能を持つ施設が複数できると人が分散し、コミュニティの結びつきが弱まる恐れがある。音楽施設も既存の「せんとびゅあ」で十分楽しめており、同種の施設が増えても価値が倍増するとは限らない。再開発プロジェクトとしては、町にどのような独自の価値や人の凝縮を生むのか、具体的なコンセプトや差別化を明確に示してほしい。	町内にはすでに多くの公共施設が存在し、日常生活に必要な機能は概ね整っている一方で、例えば「せんとびゅあ」の講堂などは利用希望が多く、スケジュールの都合から使いにくさを感じる声もあります。こうした背景から、音響や照明の整ったコンパントな発表・表現の場があれば、町民活動がより活発になるとの意見を踏まえ、現在進めている旧レンガ倉庫の利活用についても検討しています。また、文化ホールのような施設を固定席で整備するかどうかも議論されていますが、人口8700人規模の町にとってその必要性は慎重に見極める必要があると考えています。町民にとって誇りとなるような拠点づくりを目指し、不足する機能を無理なく補完する形での施設整備を進めたいと考えています。このレンガ倉庫の活用に関しては、商工会との意見交換会でも類似の提案がありました。既存の道の駅などでは十分でない産業や経済の活性化にもつながるよう、歴史を尊重しながら、新たな価値を創出する場として前向きに検討を重ねているところです。
コンセプト策定の進め方	最大の課題は、プロジェクトにわくわく感を伴う明確なコンセプトが欠けている点である。「誰のための、何のためのプロジェクトか」という問いに即答できるものがない。下田氏の「町全体がデザインミュージアム」という発言があったが、そのよう際には共感が広がった強力なコンセプトをどう作るかが重要だと考える。議論はディテールに流れそうで、目的が不明確なまま情報ばかりが蓄積し、関係者に負担が集中する懸念もある。有識者が増えることで方向が定まりにくくなる危険もあり、経験上コンセプト策定には少人数で優れた抽象化と意思決定ができるチームが必要と考える。多様な意見を踏ましつつも寄り添いすぎず、「こうである」と言い切れる体制の構築が課題である。	旧東川駅跡地の再開発については、私たち職員だけでなく、町全体として取り組んできた重要なプロジェクトです。その背景には、農協、商工会、観光協会、議会の方々など、地域を支える多くの関係者の皆さんが関わっており、これまで1年、2年、3年と時間をかけて議論と検討を重ねてきました。このプロジェクトは、私たち個人の考えで独断的に進めているものではなく、地域の将来を見据えた共通の課題認識や意見を踏まえ、必要ととれたことを形にしていけるための取り組みです。現在は、そうした経緯を経た上で、町として一定の「たたき台」を示し、そこに対して皆さんと一緒に考え、意見を交わしていく段階に入っていることを理解ください。
教育との連携	17ページのプロジェクトのねらいの教育の部分に“株主と東川ファンを対象とした”と記載されているが、町の子どものための教育は入らないイメージか。	施設整備にあたって「文化」「社会」「教育」「経済」といった分野別にプロジェクトを推進していますが、それは特定の世代を対象外にする意図ではなく、検討すべき視点の例示です。町としては、子どもから高齢者まで、すべての世代の暮らしに寄り添った施設を目指しています。とりわけ教育に関しては、先日も意見をいただくなど、関心が高いことを十分に認識しています。
	人口増により東川小学校の児童数が増えすぎており、様々な支障が生じていると感じる。新たな施設を検討するに際しては、子どもたちの居場所も併せて検討いただきたい。	町として子どもたちの居場所を大切に考えており、「そらいろ」の開設など取り組んできたが、それでも不十分という声も多いことも認識しています。東川小学校の児童数はこの10年で90名増加し、現在の在校生は450名で、移住者が東川町を遊ぶ背景には、町が子育て・教育・福祉に力を入れてきた成果だと思います。一方、支援学級に通う児童数は4倍に増加し、支援が必要な子どもへの対応が難しくなっており、その他の子どもたちへの支援が手薄になるなどの課題はありますが、町の教育・子育て環境を維持・発展させるには、こうした課題にもしっかりと向き合い、東川町らしさを守りながら、工夫と予算を投入して取り組んでいく必要がある。民間の取組である「ASOBIBA!」からも同様の声が寄せられており、専用施設の整備はすぐに難しいとしても、いろいろな工夫をしながら対応していきたいと考えます。
	東川高校や東川国際文化福祉専門学校と連携して、デザインをテーマにした学科を設ける案がある。こうした教育機関と連携しながら、将来の町づくりを進めていく中で、若い世代の活躍の場を増やすことが重要であると感じている。特に中学生と高校生の、放課後の活動や休みの過ごし方の充実度を高めることで、より良い町づくりにつながるのではないかと。文化や歴史を知る機会が増えることで、町民の生活が豊かになることを願っている。	東川町では、「人づくり」「教育」を柱とした町の将来像を見据えた取り組みを進めています。その中で、東川高校は町と連携しながら教育活動に取り組んでおり、東川国際文化福祉専門学校へ名称変更がなされた中で、高校の存続を考えると、例えば「デザイン」をテーマにした学科の設置などの案もあります。町の新たな施設や取り組みと運動させながら、町の将来を考えていきます。
	この建物が、セカンドキャリアを考える学びの場になることを願っている。自身も農業経験はないが興味があり、現在さまざまな良い話を聞いて頭が整理できていない状況。AIを活用した学びの場として、子供だけでなく現在の参加者全員が学び合い、将来的にはその知識や経験を子供たちへ引き継ぐことができる場になることを期待している。	学びをテーマにした多様な取り組みが進められており、町主催だけでなく民間主催のイベントや場づくりも活発に行われています。例えば、LIPフェスというイベントが開催され、高校生を主な対象としながらも、一般の方や親子での参加も歓迎される学びの機会となっています。旭川市からの参加も可能であり、教育委員会も関与しています。町としては、こうした学びの場を、まちづくりの重要な要素として位置付け、今後も積極的に展開していきます。
	多くの高校生は旭川から通学しており、東川に滞在するのは授業の時間だけで、町への関心や愛着が薄い。何もすることがないため放課後は旭川に戻ってアルバイトをするケースも多く、校舎や町に興味が持っていない可能性がある。高校生が町の魅力を町外に発信し、その反応を受けて自分たちの町の価値を再認識できる仕組みがあれば、自分たちの評価として受け止めることもできる。小中高を問わず交流や見学の機会を設けるなどの活動があればと考える。	東川高校は定員80人に対し、今年度は70人を超える入学者がありました。近隣では、美瑛高校が定員40人に対し3年連続で20人を下回り、募集停止が決定された中で、東川高校の生徒数が回復しつつあるのはこれまでの取り組みの成果で、町と高校との連携による継続的な取り組みがあります。町の魅力が保護者の選択にも影響しており、「東川高校に行かせたい」と感じる家庭が一定数あることは、大きな強みです。これは学校だけでなく、町全体の魅力づくりが進んできた結果でもあります。ただ入学者を維持するだけでなく、町として「どんな学びを提供するか」「子どもたちに何を伝えるのか」について、今後さらに深く考えていく必要があると感じています。現在、「ものづくり」や「デザイン」といった分野を新しい学びとして取り入れる案も出ており、参考にしながら検討していきます。

	意見、質問等	町からの回答/今後の対応
電車の活用	郷土館にある電車を新しい場所に展示しようということもあると思うが、修繕等は考えているのか。そこに展示してあるのは、木工の力によって綺麗に内装されているという話もあるが、かなり傷んできているので、もし移設するのであれば修繕をして働けるような状態に持っていくことはできないのか。	電車を出すことを決定したわけではなく、あくまで一案として検討しています。仮に展示するにしても、修復が必要であり、電車を動かす（自走させる）ことは現実的には難しいと考えています。これは過去に運営していた電気軌道関係者からも、復元・可動化はほぼ不可能という見解を得ていて、タウンミーティングで住民から提案があったことも踏まえて、無理であろうということをお伝えしました。駅舎の復元に関しては、調査資料では建物の中に電車を展示することで劣化を防ぐ想定ですが、駅舎の復元までは想定してませんが、持ちかけているフラットホームを元の状態に修復し、元の場所で電車を展示することで、当時の雰囲気を感じることができると考えていましたので、駅舎のあり方を含めて、懇談会の中で検討いただくことを考えています。
	電車や駅の存在を活かし、電気軌道の車両を動かして「キトウシ」や「旭岳」まで運行し、田畑の景色を楽しんだ後に「きとろん」で入浴する観光はどうか。単に電車を展示しておくだけでは集客が難しく、北海道でも客足が遠のく例が多い。古い車両で運行は難しい面もあるが、常に人を呼び込むためには電車を実際に動かすことはできないか。倉庫の端までなら50m程度の線路設置も可能ではないか。	旧東川駅跡に展示されている列車の取り扱いについては、老朽化だけでなく、道路を使つての移動が現実的でないこともあり、施設内で保存・展示する方向で検討しています。建物に収めたとしても、フラットホーム横に直すことも選択肢の一つです。将来的には線路を敷き、旧駅跡地に列車が通っていた歴史を可視化できるような表現も必要と考えています。
	旭川電気軌道の共栄バスセンターに保管されている、前輪2軸の復元車両「MR430」を時々借りて電車と並べて展示すると、子ども、特に男の子に喜ばれる可能性が高い。前身が路面電車で、その後バスに転換された歴史を持つ。MR430は、高額な費用をかけてレストアされ、走行可能な状態。実際に倉庫から出て動く姿を見て感動し、YouTubeでも数百万回再生されている人気コンテンツ。時々こちらで走行展示すれば、新しい観光交流の魅力的な場所になる可能性がある。	新しい交通体系の構築にあたっては、過去に実施していたデマンドタクシーの見直しも含めて、旭川電気軌道との関係性を深めていき、総合的に進めています。現在、路線バスも電気軌道が運営し、また、旧東川駅跡地は電気軌道の所有地であるなど、電気軌道と今後の協議を進め、バスなどの地域交通施策と併せた連携を模索していきます。
	郷土館に保管されている電車は、廃線時の塗装のまま非常に良好な状態で保存されている。一方、東旭川の野外展示されているもう一台は何度も塗り直され、状態が悪化していると聞いている。産業遺産の価値が再評価される中で、塗り直しではなく、当時の塗装を可能な限り保持し、修復も当時の手法で行うことが海外では一般的。電車などの産業遺産保存には専門家の意見を取り入れ、適切な方法を検討してほしい。展示する場合、ガラス張りなど日光による劣化防止のため、最適な方法で保存することを望む。	電車を移設し展示を行うとすれば、ご意見を尊重したいと思います。旭川電気軌道とのやり取りの中でも、東旭川に展示されている同型の車両が危険な状態にある一方で、東川にある車両は良好に保たれており、会社としても歴史的価値を認め、東川での保存・展示に協力したいという意向を示していただいています。具体的な展示方法や専門家の関与についてはこれからの検討となりますが、ご意見を尊重しながら、しっかりと検討していきます。
展示機能（全般）	せんとびゅうで開催中の織田コレクション展示は、人が訪れている様子がほとんどない。触れられず、使えず、固定された展示は集客力が低いという声をよく聞く。専門家には価値が理解されるが、一般客には魅力が伝わらない。展示品の入れ替え時にオークションを実施し、話題性を生み出す仕組みを導入してはどうか。チャチャワールド（生田原）は、世界のおもちゃを集めた施設で、オープン当初は大きな集客があった。しかし「触れられない」「遊べない」ため、現在は閑散としている。旭川動物園は「行動展示」により同じ動物でも毎回違う体験を提供し、集客に成功。鉄道展示について、廃線後の公園にSLを置いていても人が集まらない。展示は地元民向けの郷愁にとどまり、外部客には響かないと疑問に感じる。	東川町ではかつて「デザインミュージアム構想」を描いており、今回のプロジェクトもその考え方を踏まえた上で発展させたものです。織田コレクション単体で集客ができるとは考えていませんが、それを活かした空間づくりにより、人を呼び込む仕組みを作ることが重要だと考えています。展示のあり方としては、企画展だけでなく、収蔵車をガラス越しに見られるようにするなど、常設でも魅力が感じられる空間を検討中です。その設計には、旭川家具とも親和性の高い建築家・田根剛氏を起用し、見せ方の工夫に力を入れています。また、町の歴史的資源である電車についても、現在は郷土館において週1回の公開にとどまっている状況を見直し、開催日数の拡大や展示の工夫により、町の記憶としての価値と集客性の両立を目指します。こうした既存資源を活かしながら、新たなコンテンツや販売手法との組み合わせにより、地域の魅力発信を図っていきます。
展示機能（織田コレクション）	触れられる、座れる椅子があったら楽しいのではないですか。	織田コレクションの椅子には実際に触れることができるものもありますが、中には高級外車並の価格がつくような希少で高価な品も含まれており、全てを自由に触れるようにするのは難しい面もあります。そのため、触れる・触れないの区別を工夫する必要があります。一方、「椅子に触れる体験」という観点では、必ずしも織田コレクションに限定せず、東川町で製造された家具など、地元産業と連携した展示と、織田コレクションの価値の両方を感じてもらい、販売振興や産業のPRや販売にもつながることが必要と考えています。
	織田コレクションは「座ったら怒られるコレクション」として不評ですが、何とか改善できないかと思っています。	織田コレクションには「座れない椅子が多い」が、企画によっては座ることができるものもあります。ただし、一部には非常に高価な椅子も含まれており、破損などがあれば大きな問題となるため、扱いには慎重さが求められます。大切なのは、コレクションが持つ文化的・教育的価値をどのように活用し、町として活かしているかを考えていくことだと思います。
	以前は政府米を保管していた倉庫で入ったことがあるが、倉庫は熱を遮断し、内部がひんやりしており、紫外線や赤外線に影響を受ける展示物の保管・展示に適していると感じている。織田コレクションでは椅子などを展示するのか。	レンガ倉庫の活用については、現状の状態をそのまま使うのではなく、空調設備をはじめとした収蔵環境をしっかりと整備した上で展示活用する方向です。現在も引き出しとなっているレンガ部分については、構造上の問題から整備に非常に費用がかかる見込みで、内部に独立した建物や新たに構築するような方法も考えられます。そこまでしなければ、このレンガ倉庫を活かすことは難しく、費用がかかる見込みです。対象となる建物はレンガ造りだけでなく、ブロック造、石造りなど複数の構造形式があり、それぞれに応じた対策を検討する必要があります。全国の実先地においても、レンガ倉庫群を活用しているところはあり、現地調査を行い、事例を活かしていきます。
	関係者懇談会で出た有識者や関係者の意見は、今後情報公開されるのを確認したい。当初は織田コレクションを基盤としたミュージアム構想からスタートしており、織田コレクションは非常に重要な役割を持つ。ただし、「なぜ織田コレクションが町にあるのか」が住民に十分に伝わっていない現状がある。町民に浸透させるためには、町民と一緒にコレクションの価値を考える場づくりが重要。写真のまちが40年間続いたのは、町の人たちが一緒に関わりながら考えてつくってきたから。織田コレクションは直接的な生活影響がなくても、住民が自分たちの暮らしを考えるきっかけになる可能性がある。長期的には「暮らし版の写真のまち宣言」となり得るポテンシャルを持つ。完成後も「どう活用するか」を町民役場関係者が継続的に話し合い、検討できる場を持つことが重要。プロジェクトは完成がゴールではなく、その後も続ける仕組みや工夫が必要。	懇談会を年5回開催し、来年1月を目標に基本構想の策定を進めています。構想がまとまり次第、公表を予定しており、検討過程の資料についても可能な限り公開できるよう内部で検討します。また、懇談会終了後に本プロジェクト基礎調査概要版を町のホームページで公開するなど、懇談会に参加していない町民にも進捗状況を共有しています。織田コレクションについては説明の機会が十分に取れていない現状があります。元々「織田コレクションのデザインミュージアム」という名称であり、東川発、かつ東川が発する家具デザインミュージアムともホームページに掲載し、隈研吾氏の協力で建設支援の会が立ち上がり、現在も企業版ふるさと納税などを通じて資金調達を進めています。反面、異論があることも事実で、我々もコレクションの価値を町民と共に理解を深め、共有していることが今後の課題だと考えます。国内での展示を重ねる中でコレクションの価値を理解いただける方が増え、評価も高まっています。町としては、織田コレクションとデザインミュージアムの位置づけを整理しながら、東川町の暮らしと結び付け、産業振興などを踏まえ、調査資料として整理したことを理解いただき、提言などあればいただきたいと考えています。
	博物館やミュージアムの起源は倉庫であり、レンガ倉庫はそのコンセプトに適していると感じる。織田先生は「展示物は膨大でなくともよい。全国各地の展覧会から貸し出しを受けることで、フラットフォーム的な施設にできる。」「収蔵庫内の保管状態を見せることで、きらびやかな展示にも匹敵する魅力を持たせられる。」との考えを持っているのでこれらは計画書22ページ左側のオレンジ部分での実現を期待している。田根氏は弘前の赤レンガ倉庫監修や帝国ホテルの大プロジェクトに携わる。東海大学旭川校出身で、Vでも活躍中で、隈研吾氏も世界的建築家。両氏が資金面を問わず町に関わっていることは大きな価値がある。大規模プロジェクトとして、進捗の公開や話し合いの場を持つことで、完成後に施設への愛着を持つ人が増えると考ええる。	「KAGUの家」でのイベントには参加できなかったが、織田コレクションに関する話は把握しており、田根氏とも収蔵展示のあり方について話し合っています。織田先生からは「広くなくてよいが、しっかり展示してほしい」との意向も聞いており、その思いを尊重した展示空間のあり方を検討したいと考えています。収蔵物は非常に点数が多く、かつ年々価値が高まっているため、収蔵し見えない状態の部分があったとしても、表に見せる部分は工夫して収蔵展示となるよう検討することを考えています。

	意見、質問等	町からの回答/今後の対応
展示機能 (織田コ レクション 以外)	新しい施設は隈研吾氏が設計するが、それとも別の業者かが気になる。町中でもこの点について賛否両論がある。東川町は先進的な取り組みを行っているが、うわさ話や口コミ文化が強く、良い面と悪い面の両方がある田舎町特有の風土がある。デモリットや課題も含めて町民が納得できる情報発信を行えば、安心して受け入れられるのではないかと。15ページにある町全体の活性化イメージについては、旧プロジェクト名から変更されたことに安心感を持った。駅跡再開発は郷土館の活用と同様、既存の歴史的施設を閉鎖するのではなくリニューアルして伝えていく方向性を理解。 自身は移住者であり、夫は東川町出身だが、歴史や文化について知らない部分が多い。音楽行進などの行事も知らない住民がいる。郷土館や旧東川駅跡地において、町民や子どもたちが東川の歴史や文化を学べ、未来につながるような施設、ソフト面を知ることができる場があると良い。	今回のプロジェクトを進めるにあたり、隈研吾氏の力をどう活かしていくのか、町内の木造施設「KAGUの家」に隈研吾都市建築設計事務所の職員が2名常駐しており、現在は東京に戻っている元室長の田口氏は「東川」の感覚を理解できたことが一番よかった」と語るなど、町との深い信頼関係が築かれてきた。そういう社員がいてくれるということも一つの強みであり、それも含めて取り組んでいきたいと考えています。 また、本プロジェクトでは、郷土館の活用を含め、町の歴史や文化をどのように次世代へ伝えていくかも重要なテーマとなっています。東川町は開拓130年を迎え、さらにその以前から先住民族であるアイヌの人々が暮らし続けていた地域でもあります。町には「キトウシ」や「大雪山岳源泉」など、アイヌ語由来の地名や風土が今も息づいていますが、それらは年々人々の記憶から薄れつつあります。 郷土館やレンガ倉庫跡などを活用し、こうした歴史や文化を可視化・再発信することで、子どもたちや若い世代にも伝えていく責任があると考えています。例えば、かつて町を走っていた鉄道の記憶など、町民の暮らしに根ざした文化や記憶も含めて、丁寧に残し、未来へつなぐ場づくりを進めてまいります。
	隈研吾事務所による展示施設案について、町民や自身も具体的なイメージが湧きにくい。町として参考にしたり視察した、隈事務所の建築や展示があれば伺いたい。	隈研吾氏の「建築プロダクト」に関する展示や収蔵について、2〜3年前に東京美術館で一度展示が行われ、職員も何人か見に行っており、隈氏の建築プロダクトに大いに影響を受けました。 現在は、東京・天王洲アイルにある「寺田倉庫」にも隈氏のプロダクトが展示・収蔵されていますが、全プロダクトではなく一部に限られており、隈氏からは「その展示品を必要に応じて活用して構わない」との話をいただいています。町としては、これを単なる隈建築として扱うのではなく、建築建築全般にわたるプロダクトとして考えています。
	いろいろな活動をしているのですが、今、町で何が課題かと考えたときに、私の世代では中学生と高校生の活躍の場が少なく感じている。 文化や歴史を知る機会が増えることで、より良い町づくりになるのではないかとと思う。	町内には郷土館や資料館など、歴史や文化に触れられる施設がありますが、今後の活用方法について見直しを進めています。とくに郷土館については、東川町の文化・歴史をより身近に学べる場として、中高生を含む子どもたちが地域を知る機会を提供する場とすることを目指しています。 現在は開拓の歴史を中心とした展示が行われていますが、これに加えて、大雪山の麓で発展してきた町の背景や農業を基幹産業としてきた歩みを改めて整理し、町のアイデンティティを再確認するようリニューアルを検討しています。 また、東川町が「写真の町」であることを踏まえ、大雪山の自然や町の歴史を写真で表現する手法も有効と考えています。せんとびゅうあいの「大雪山アーカイブス」では歴史資料の保存・保管・閲覧が行われていますが、より多くの人に伝わるような展示の工夫や発信の場づくりも必要です。 鉄道車両（電車）の展示については、今回のプロジェクトと連動した動かすかどうかの検討はありますが、無理に出すことを前提とせず、施設全体の役割に町民への価値提供を重視した見直しを進めてまいります。
商業機能	計画は素晴らしい、住民として楽しみにしている。コスト面は概ね理解した。公共性と商業性の両方を持つ施設の場合、どちらに比重を置くのか方向性を知りたい。公共運営でも入場料を取るイベントの実施は可能か。 自身は台湾と関わりがあり、台湾人が訪れる際に、毎回異なる内容を楽しめ、日本語学習など教育的要素も含む付加価値のある仕組みが欲しい。それらが東川町の収入につながるモデルになってほしい。物販などインプット面での考え方も聞きたい。	施設運営費に関しては、現時点で仮の数字として1億円を試算しており、これは面積に単価を掛けて算出したもので、収入がなかった場合の経費として算定しています。今後は物販や入場料収入など、収益性の検討を進め、有識者や懇談会メンバーの意見も踏まえた検討を行っています。 また、施設の性格として、公共性と商業性のどちらに重点を置くかは重要な論点です。町としては、収益のみを目的とするのではなく、東川町の魅力を高め、町民が大切にされる場所を目指すべきと考えています。近年、町外からの投資提案が増加していますが、町の価値や暮らしを守る姿勢を丁寧に説明することで、商業目的のみの案件は自然と引いていく傾向にあります。 町民が東川で自分らしく暮らせる環境を守ることが重視し、今回の施設整備についても同様の方針で検討を進めます。
	以前、町長が農産物の直売所を設ける構想を話していたと認識している。2〜3年前に農協の総会でも言及があったと記憶しているが、その進捗や計画状況を教えてほしい。 かつて農協でレンガ倉庫を直売所にする案があったため、期待している。現在、道の駅の販売スペースは不足しており、秋にはオーバーフローするなど、町内の農家が増えても対応が難しい。駐車場も足りず、車を停めるのが困難な状況で、農協も運営しにくい。 農産物に特化した販売施設ができれば、より多くの出荷者が増える可能性が高いと考えている。農協の方針とは別に、多様な販売チャネルの存在が望ましい。今後の検討をお願いしたい。	道の駅は観光客や町民に広く利用されていますが、農産物の販売は一部にとどまっており、地元農産物を中心とした直売所は存在しないのが現状で、地域の農業や町の魅力をもっと身近に発信できる場として、直売所の必要性を指摘する声が以前から上がっています。 過去にはキトウシ地区で、主に退職した農業経験者による農産物直売所の運営が試みられたことがありましたが、様々な問題により継続には至りませんでした。現在の農協の販売方法や、農業者の生産・出荷体制を踏まえると、安定的に農産物を集めるためには十分な検討が必要と考えます。 一方で、「まずは気軽に立ち寄れる直売所があれば、農産物も自然と集まり始めるのではないかと」という前向きな意見もあります。また、旧レンガ倉庫跡地については、「農業を表現できる場」としての活用を望む声もあり、町としては、道の駅とのすみ分けや連携のあり方を含め、将来の方向性を丁寧に考えていく必要があります。現在は、ライスターミナルの完成も視野に入れながら、農協や観光協会など関係機関と、東川町らしい農業の魅力発信のあり方等について議論を始めている段階です。
	駅跡再開発エリアが魅力的になるほど、人がそのエリアに集中し、「道草館」界隈の人流が減る懸念がある。既存施設「道草館」と新たな再開発エリアとの差別化をどう考えているのか。 基本構想19ページの「本プロジェクトにおいて実現すべきこと」の冒頭にある「経済的にも」という点について、収益が上がるビジネスモデルの構築をしっかりと検討いただきたい。観光客や町外来訪者にどれだけ消費してもらえかが重要であり、しっかりと仕組みを作ってほしい。	現在、中心となっている「道草館」や、交差点を挟んで位置する「せんとびゅう」など、東川町の市街地には既に多様な施設が点在しています。駅跡開発もつかりバランスをとって進めていけば1箇所に人が集中する心配もなくなり、各拠点が連携し合うことが東川らしく、まち全体としての魅力が高まるような開発を進めていくことが大切です。 農業跡地という場所の歴史性を活かし、東川米などの農産物の直売所として工夫するなど、他施設との差別化を図る意見が出されています。また、商業者の方々からは、新たな施設整備が既存商店に与える影響や、土地利用の在り方についての懸念も寄せられています。開発にあたっては、地域商業が活きる仕組みを検討しなければなりません。 人が集まる場所となることで経済的な収益は期待されますが、その一方で、周辺住民の暮らしへの影響にも配慮が必要です。ただ人を呼び込むだけでなく、地域全体の調和を図る視点を持って進めていくことが重要と考えています。今後も、懇談会などを通じてご意見を伺いながら、検討を進めてまいります。
	町の中心部は現在、道草館を中心に来客が多く、大型建物が建設され店舗が入ればさらに賑わうと考えられる一方で、一部の商店街では、この動きが「駅が移動する」という状況と捉えられており、不安が広がっている。自身も過去に桜木町周辺で、駅の移動によって商店街が衰退した経験があり、そのような懸念を抱く事業者がいることを町として把握してほしい。	地域全体が連携しながら個々の良さを発揮する「分散型」のまちづくりであり、町内すべてが「デザインミュージアム」であるという考え方は非常に重要です。 だからこそ、特定の場所だけが集中的に発展し、そこに人や消費が集中するような一極集中型のまちづくりは避けなければなりません。今後、施設の運営費を賄うために集客を強化する議論も出てくると予想されますが、その際に他地域とのバランスを崩すことなく、町全体としての魅力を維持・向上させる視点が重要です。今後の議論の中でも重要になると考えます。
その他 機能	石造建築の反響を活かし、「トリビートモス」のような音響設備を整えて映画館として活用できないか。町内にホールがないことを残念に感じており、過去に札幌交響楽団を招いた際も小学校体育館を使用していた。ホール機能を備えた施設ができれば魅力的である。 要別町の赤レンガ倉庫を改築したコミュニティホール「蔵KURARA」で演奏した経験があり、天井が高く梁が太く置きの良い空間だった。同様のホールができるならば応援したい。	22ページ右端にある頑丈なレンガ倉庫の利活用について、催し物などを開催できる多目的スペースとしての案が出されています。音響設備が整っており、催し物、講演会、芝居の観劇、高齢者グループによる発表会・練習の場としての活用を想定しています。発表的な利用に適した空間として、地域住民の活動を支える場所としての活用を見込んでいます。
	右側の多目的スペースについては、すべての事業者、農家、木工家具業、商業者が「自分たちが中心である」という意識を持てることが重要である。具体的に建物でそれをどう表現するかは難しいが、今後の設計段階で形が見えてくことで意見交換がしやすくなると期待している。 役場主導か民間担当かを含め、使い方を検討しながら決めることで、より魅力的な施設となるだろう。また、町内の様々な祭りやイベントの補充場所としての活用も期待される。例えば、消防の出初式の集合場所や、お神輿や音楽行進の最終地点など、人々が集まる象徴的な場所として機能すれば、町民がこの場所に親しみを持ち、共感できる場になると考える。	東川町では、行政と民間が連携する「半官半民」の形を重視しています。町が主体的に関与しつつ、民間の手法や人材を取り入れることで、運営費の確保や柔軟な事業展開が可能となり、相乗効果を生んでいます。 また、地域の担い手が中心となる仕組みづくりが重要であり、町外の関係者に一任するのではなく、町内の人々が主体的に関わることを求められます。 町内イベントの拠点づくりにおいても、各団体が主導して行事を行う中で、新たな拠点が出発点・合流点となり、人が集まり、町のにぎわいや新たな動きが生まれる場となることが期待されています。

	意見、質問等	町からの回答/今後の対応
施設の運営	新施設について、民間委託などの運営方式を検討していると資料で確認したが、運営方式の検討に当たり、既に調査済みの施設や自治体など、参考になる優れた事例や先行例があれば知りたい。 町民や有志団体がタウンミーティング開催を依頼する場合、確保できる時間はどの程度か。開催内容に関しての制限、望ましい開催形式や運営方法があれば伺いたい。	民間委託を前提とするのではなく、運営形態の一つとして選択肢に含め、適切な形を検討していく必要があります。施設に多様な機能を持たせる場合には、一部に民間の力を活用することも視野に入れながら、独自の運営手法を模索していきたいと考えています。これまで町では、職員が全国各地の施設を視察し、運営やまちづくりの参考になる事例を調査してきました。例えば、文化を軸にまちづくりを進める八戸市の核施設である「八戸ポータルミュージアムはっち」や官民連携での開発運営を進めている紫波町「オガル」、民間主体で新規事業を展開する「ヤマガタデザイン」、台湾にあるデザインミュージアム「松山文創区」などの事例があります。これらを参考に、東川町らしい持続可能な施設の在り方を模索していきます。 また、地域の団体からの開催要望にも柔軟に対応していく方針で、今回のような形式をベースに、要望を踏まえて適宜調整しながら開催していきたいと考えています。
	計画ではハード面が先行しているイメージだが、人材と運営形態などソフト面を先行してほしい。 非常に人手がかかる運営となることが想定されるため、それを誰が担うのか、まず役割を決める必要がある。協力隊が活躍するための場所として駅舎周辺をつくるような順序となれば一番良い。また、教育委員会が非常に重要な役割を担うのではないか。	計画はハード面の整備だけでなく、ソフト面や運営体制も含めた検討が必要であり、現段階では決定ではなく、議論の土台として捉えてほしいと考えています。 織田コレクションの保有に伴い、図録や情報の整理、活用方法など多くの課題があり、協力隊の活躍を得ながら対応を検討中です。郷土館についてもリニューアルの必要性が高く、現在の展示では東川町の独自性が十分に表現されていません。レンガ倉庫跡地の活用とも連動し、写真を通じて大雪山文化を伝えるような、より魅力的な郷土館への再構築を進めたいと考えています。清水敏一氏からの寄付金も活用し、協力隊とともに今後の方向性を検討してまいります。
	デザインミュージアムと産業面の両方を新設A棟B棟でしっかり運営するには、難易度の高い作業になる。運営主体をどのようなスケジュール感で人材確保する予定なのかを確認したい。 座組み（運営体制）の構築が難しいと感じている。可能であれば3月までに主体者を決定し、基本構想に盛り込むほうが、取組内容への反映がしやすい。スケジュールによっては運営主体が見つからず、町役場の業務負担が増大する懸念がある。	デザインミュージアムと産業分野の学び、そして人々の交流が相乗効果を生む場所をイメージしています。これにより、施設単体ではなく市街地全体へと波及する効果を期待しており、各施設の連動性を視野に入れて検討しています。ただし、この取り組みの主体となる人材や組織の方向性は現時点では未定であり、懇談会を通じて有識者の意見を踏まえながら検討が進められます。構想段階では、あくまで基本的な考え方を定め、その後の基本計画で具体化していく流れであり、主体者のあり方も含めて段階的に検討する必要があります。 行政がすべてを担うのではなく、民間との適切な連携、中間的な主体の在り方など、東川町らしい手法による運営体制の構築を模索しています。町民や町内事業者にとっても納得感のある形を目指し、構想策定と並行して組織の在り方についても議論を深めていく考えです。
	織田先生の家具は非常に繊細で扱いが難しいため、早期に専門家を招き、適切な管理や展示方法を検討してほしい。 ミュージアムを魅力的にするには、建物の設計と並行して、あるいはそれ以前に、運営主体を明確に決めることが重要である。 設計事務所を運営する経験から、誰が使うかわからない建物の設計は可能だが、面白みや価値のある建物をつくるには、利用者や運営者と密に連携して設計を進めることが不可欠だと考える。 教育との連携を考え、高校生や中学生が学べる施設にするためには、運営方法を先に決めてから、または同時に設計を行う方が、より魅力的な建物になると考える。	現在、織田コレクションの複数の場所に分散して保管されていますが、一部には保存環境が十分とはいえない場所があり、早急な収蔵場所を改善する必要があり、資料の適切な管理と保護のため、実質的な収蔵施設を整備する必要があります。収蔵対象には扱いが難しい資料も含まれており、収蔵方法や展示の在り方については、専門家の意見を取り入れながら検討する予定です。さらに、単なる保管ではなく、収蔵しながら一部を展示する、あるいは来訪者が実際の収蔵環境を見学できるような施設の案もあります。 こうした構想を実現するために、建築家の田根氏に参画いただく予定です。田根氏は東海大学旭川校の卒業生で、東川町や地元の家具産業との親和性も高く、歴史や地域性を大切にする建築スタイルで知られています。これまでの意見交換を通じて、今後の方向性について非常に前向きな意見が得られており、期待できると感じています。 構想策の提示時期については、今後開かれる懇談会の進捗状況に応じて、今年の夏または来年の初めごろに、具体的なイメージ案をお示ししたいと考えています。なお、施設の運営主体については、公設民営や民間事業者への提案型委託（プロポーザル）なども考えられます。
	東川町の公共施設の場合、建物が完成してから事業者を探す形に進んでいると思われるが、この方法は今回も同様なのか。 デザインミュージアムにおいて、どのような展示を行うのか、どのような人物が学芸員になるのかが決まらなければ、建物の計画も決まらないのではないかと。	これまでの町の取り組みにおいても、あたかも町が全てを決定しているように見える場面はありますが、実際には公設民営など民間主体の手法を活かしながら、プロポーザル方式で運営者を選定し、町がすべてを決めているわけではありません。 今回レンガ倉庫再開発や織田コレクションのミュージアム構想においても、施設の箱物だけでなく、どのような運営体制とするかを早い段階から並行して検討する必要があると考えています。懇談会などを通じて構想の方向性を共有し、運営方法についても検討していく必要があります。 東川町では、これまで行政と民間が連携しながら資金を生み出し、町の経済を活性化してきた実績があります。したがって、行政が完全に手を引くのではなく、町が一定の関与を持ち続ける半官半民のイメージを持っています。民間の方々とともに、どのような関わり方が可能か、どのような組織が必要かを丁寧に議論し、運営モデルを模索していきます。 ただし、「収益が出せる」とする町外企業などに全てを丸投げするような運営は絶対に行わず、地域との連動を大切に進めてまいります。
施設の運営	新しい大規模なミュージアムの開設が予定されているが、「デザインミュージアム」という名称は現在保留されているが、東川の歴史や文化を盛り込んだ施設になることが期待されているものの、民営での運営が可能かどうか疑問がある。 歴史やコレクションを解説する人材、学芸員的な役割を担う複数の人材が必要であり、民営だけで運営する場合も、一部は役場職員が対応し、学芸員を雇用する形が望ましいと考えている。	デザインミュージアムについて、運営方法として町が直接学芸員を雇用する形も考えられます。公的・民間的な要素を組み合わせた柔軟な体制を考慮して行く必要があると考えます。これは一方に偏るのではなく、町の特性に合った仕組みを構築するという視点からの検討です。 また、教育的な活用も重視しており、ふるさと教育の一環として、小中学校の教育課程に取り入れ、学年、教科について、検討していくことが可能です。 さらに、東川町独自の教育プログラム「グローブ」の導入も考えられるほか、このミュージアムは町の文化財としても大変貴重な施設であるため、生涯学習的な価値も高く、全年齢を対象としたプログラム展開が可能であり、場合によっては町外の方々に向けた教育的発信の場としても活用していけると考えます。
	東川町は他の町に比べて「何をしたいのか」がわかりやすい点が魅力だが、子供たちの心に最後に残るのは、ふるさとの景色や味ではないか。30年後、子供たちが戻ってきた時に、景色が全然違っていたり、あったものがなくなったりするのはやはり寂しいと考える。 再開発エリアで古い建物を活かすことは良いが、建物の維持管理修繕費が年々増加する課題がある。自身は北海道開拓の村の修繕管理を3年経験し、修繕費の高騰や雪降ろしの負担を懸念する。 「ユークラ織館」、「雪の美術館」、「カナディアンワールド」、「夕張市石炭博物館」など、利用者が減っていく一方で修繕費は上がり続け、年間20万人の集客が必要とされるなど運営していく上で必要なラインがわかられば安心。景色や歴史を守るため、既存施設を30年、40年単位で長期的に維持管理する企画や方針を示してほしい。 新しい再開発施設が周辺商店街の利用者を奪うことへの懸念もあり、それらの影響も考慮した進め方が必要ではないかと。	レンガ倉庫の再活用に関しては、すべてを改修すると約50億円の試算がありますが、これは確定ではありません。新築に比べて改修は維持費が倍かかるという課題も十分認識しています。今後の議論や町民懇談会を通じて、維持費を抑えるために新築を一部加えるなどの方向性も含め、検討していく予定です。一方で、赤レンガの倉庫や石積み倉庫は歴史的価値が高いとされており、これらは最低限残して活用していきたいと考えています。町の誇りである風景や歴史を次世代に残していくことが東川らしいまちづくりにつながります。 また、「郷土館」も木造のため修繕費が課題ですが、開拓の歴史や旭岳の存在を伝える拠点として重要であり、再整備を含めて赤レンガ倉庫と役割を分けながら進めていきたいと考えています。 まち全体の運動と誇りにつながる施設であることは、我々も大事にしたいという思いは同じであり、あの場所をテーマパークにするつもりはないことをお伝えします。

	意見、質問等	町からの回答/今後の対応
対話の方法	<p>行政は優秀である一方、意見集約を行政内で抱え込み過ぎているのではないかとという印象があるので、民間団体に意見集約を委託協力依頼する方法も検討してはどうか。</p> <p>立ち上げた団体、「ブルースクール東川」で子育て世代や子どもたちの率直な意見を集約するとか、「アソビバ」で遊びや交流を通じた対話の場を運営しているが、ゆったりと時間をかけた対話を通じて、行政と民間が協力しながら町づくりを進める体制が望ましい。</p>	<p>地域の皆さんが立ち上げている団体やグループが、どのような場や機会を求めているかについては、遠慮なくお話しいただきたいと思います。</p> <p>必要に応じて対話を重ねていくことが重要だと捉えています。</p>
	<p>同僚が「くらし体験館」に滞在した際、家具資材やタイルなどの質の高さに感動していた。</p> <p>参加者の「暮らしの町宣言の」というアイデアを受け、東川町民が暮らしを大事にする姿勢は日本全体の文化的価値であり、それが世界にも発信できる拠点になれば嬉しい。</p> <p>近年の公共建築プロジェクトは完成後に賛否両論が起きやすい印象がある。今回は役場も含め、過去とは異なるプロセスで進める意気込みを感じる。「一緒にトライする」形について、過去の事例から学びつつ、現在どこに同様の形が存在するのかを伺いたい。</p>	<p>くらし体験館での取組を通じて、振興公社と連携をして職員も取り組みから学び感覚を共有してきたことは、これまでの大きな成果です。</p> <p>町がよくなるために率直な意見を伝えてくださる方々に感謝し、それをどのように活かすかが私たちが大切にしてきたことです。</p> <p>公共施設における隈研吾氏との取り組みが多く、疑問も出ていることは改善点と考えています。</p> <p>隈研吾氏は本事業にも関わっていただいているが、世界的な建築家である隈氏に一方的な環境づくりを依頼したわけではなく、フラットな関係で協力したいというのが隈氏の思いで、建築意匠についてもボランティアで協力をいただいています。最初は隈氏に対して少し遠慮もあったものの、このプロジェクトのスタート時点からは遠慮することなく意見交換を行っています。</p> <p>たとえば施設名については、隈氏から「KAGUデザインミュージアム」とする提案があったものの、町の方から「旧東川駅跡の再開発プロジェクト」として町の暮らしに寄り添った形にしたい旨を伝え、隈氏も理解いただいています。今後の建築設計について、関係者より隈氏が尽力いただけると聞いています</p> <p>また、織田憲嗣氏の教弟子でもある世界的な建築デザイナーの田根剛氏は、東海大学旭川校卒業者でもあり、東川町の家具業界や建築業界で知らない人はいないほどで、織田コレクションを大事に考え、展示の仕方などのノウハウについても第一人者であることから、田根氏にも依頼し、隈氏と連携しながら進めていきたいと考えます。</p>
	<p>旭川の文化会館では、新文化ホール構想のワークショップの経過が掲載され、模型もあった。</p> <p>紙やWebフォームなどで意見を募集しており、スマホが苦手な高齢者は紙で意見を書いていた。模型ができた頃に、そのような住民の声が入る場所があるとよい。</p>	<p>住民の声を丁寧に関することは大切ですが、どこまでが必要で、どう対応すべきかは町の特徴を踏まえて検討が必要だと思います。</p> <p>町長自身が独断で決定するのではなく、懇談会で意見を集約しながら進め、今回の意見も懇談会の検討材料として取り上げていきたいと思います。</p>
	<p>計画の内容はよいが、本日のミーティングが既成事実化し、単なるアリバイ作りとして住民が納得した形にならないようお願いしたい。</p> <p>「きとろん」整備においては住民、特に高齢者の意見が十分反映されなかったと感じている。</p>	<p>現在示している計画案は、あくまで基礎調査に基づく基本的な考え方の土台で、まだ固まったものではありません。これを基に基本構想の検討段階に入っただけで、今後の議論を通じて内容を深めていくことを見込んでいます。</p> <p>今回のタウンミーティングや6月30日から始まった懇談会を通じて出された意見は、今後の懇談会でも随時反映し、丁寧に議論を重ねていきたいと考えています。基本構想は今年度内（2～3月）にまとめる予定ですが、その後の基本計画策定段階でも修正の余地があるため、柔軟な対応が可能です。</p> <p>また「きとろん」に関しては、決して一方的に進めたわけではなく、当時の検討委員会で丁寧に議論を重ねながら進めてきました。現在も一部リニューアルや運営改善に取り組んでおり、少し温かい目で見守っていただければ幸いです。</p>
	<p>駅跡に織田コレクションの美術館を単体で整備しても集客できないと感じていたため、現状の計画は結果としてはよい。</p> <p>町民の視点からすると、町が何をしているのか、町長は何を考えているのかが見えにくく、疑惑が生じる状況であった。情報の伝え方には改善が必要である。</p>	<p>今回の構想に関する情報提供について、適切なタイミングや方法で十分な説明がなされていなかったことが、町民の皆さまの不安や誤解につながったと受け止めています。また、前町長の時代から構想の方向性は大きく変わっておらず、現在の構想もその考え方を継承するものです。</p> <p>しかし、町としての説明のあり方において課題があったことは否めず、町長をはじめ、職員も含めてその点を反省しています。</p> <p>今後は、町民の皆さまの理解と信頼を得られるよう、説明の仕方や情報発信のタイミングにも配慮しながら、丁寧に取り組んでまいります。</p>
	<p>このプロジェクトの基本理念は、これからのまちづくりの課題解決に繋げていくことであるため、若い世代の声を取り入れることが非常に重要である。中高生の意見を拾うことができるとよい。</p> <p>懇談会のメンバーの年齢構成や、若い方がどれほど参加しているのか、教えていただきたい。若い世代がいない場合、中学生、高校生、大学生を参加させることで、より多様な意見が集まるのではないかと考えている。</p>	<p>子どもたちの視点も大切にしたいと考えており、小・中・高校生が「東川町にとって何が必要か」を考える機会をつくり、学校の協力を得ながら意見を聞く取り組みを検討したいと思います。</p> <p>懇談会のメンバーについては、各分野の生活や福祉の実情に詳しい方々をお願いしており、年齢層はやや高めですが、商工会青年部の若手メンバーを含めるなど、多様な視点を取り入れる工夫もしています。町では今後も、幅広い世代の声を参考にしながら、将来を見据えたまちづくりを進めてまいります。</p>
対話の時期	<p>デザインミュージアムという概念について、町民の皆さんにまだ十分理解されていないように感じる。A4用紙1枚にまとまる形で、町民に向けてわかりやすく発信していただくと良い。</p> <p>PTA会議で、教育において子どもたちに必要なものについても話し合ったが、引き続きテーマを決めて意見を交換し、出てくる意見を基に、どのような方向に進めるべきかを考えたい。</p>	<p>デザインミュージアムの構想を進めるにあたり、町としてはその意義や魅力をどのように町内外へ伝えていくかが重要な課題であると認識しています。基本構想の検討とあわせて、町としての広報・発信の工夫も並行して進めていく考えです。どこまでの施設整備を行うのが、最終的な判断も求められています。</p> <p>町民の中には「デザインミュージアムだけでよいのでは」という意見もあり、教育や子育てに関わる施設の必要性をどう位置づけるかについても意見が出てくると考えています。</p> <p>倉庫については、石やレンガ造の保存価値のある部分は残り、それ以外のブロック造の部分などについては、費用対効果や構造的な安全性、活用の方向性を踏まえながら、事業費の圧縮や優先順位の整理が必要だと考えます。</p> <p>教育の面で、町民が気軽に使える「多目的スペース」の設置案も検討されています。子どもたちが表現活動を行ったり、高齢者がカラオケ大会を開いたり、さまざまな人が自由に発表・交流できる場を、レンガ倉庫の一角に設けたいと考えています。音響・照明設備を備え、スタンディングで200人、着席で100人規模の集会が可能な空間を想定しています。</p>
	<p>一般町民の立場で価値創造協議会やまちづくりプラン策定に参加した経験がある。対話や意見収集の期間が短く、十分な意見を聞くのが難しいと感じた。・今回のタウンミーティングについて、説明会的な印象を受けた。開催日程（月に実施）をもっと前から公表してほしいこと、夕方開催は子育て世代や働く世代が参加しにくい。</p> <p>事前に情報を共有し、団体や地域で意見を集めた代表が参加できる形が望ましい。情報公開後に町内で意見を集める場を設けることも有効。『町長への手紙』は存在するが手間がかかるため、現代に合った方法で幅広い町民の意見を集約する仕組みを工夫してほしい。</p>	<p>今回の基礎調査に関する資料は、6月30日に開催した懇談会後の7月1日に町ホームページで公開しました。これまで、この段階から情報公開することは少なかったのですが、今後の改善点と捉えています。</p> <p>タウンミーティングは町内各地で複数回行い、中央地区では昼間開催も予定しています。本日の内容を聞いたうえで、別地域の会で意見を述べることも可能です。また、地域のグループ等からの要望があれば、同様の会を設けることも考えています。</p> <p>町では住民の声を広く吸い上げることを大切にしており、職員も町民に近い立場で日々の業務に取り組んでいます。職員が各分野の専門知識を持ち、町民と対話しながら必要な意見を拾い上げていくことが重要だと考えています。</p> <p>今後タウンミーティングを継続しながら、より有効な意見聴取の方法についても模索していきますので、ご意見や提案があればぜひお寄せください。</p>
	<p>3月に基本構想が固まった後、令和10年に着手するまでの間に、今回のようなタウンミーティングやワークショップの開催の予定はあるか。</p> <p>基本構想が固まって模型ができ始めた頃に、「せんとぴゅあ」整備時のワークショップのように、住民が本事業について広く知れる場は考えているか。</p>	<p>今年度は基本構想の策定を進める中で、施設の配置やイメージについて一定の方向性を定めていく予定であり、その過程で全7回のタウンミーティングを実施しています。市街地では昼と夜の2回開催し、地域を越えて多くの住民が参加していただいています。</p> <p>さらに、タウンミーティングの特別版として、コミュニティ単位の少人数の集まりにも説明を行っており、広報等を通じて周知も回っています。今後もこうした意見交換の機会は積極的に増やし、説明を丁寧にやっていきたいと考えています。</p> <p>計画の進行に合わせた住民への周知については、模型やパース、平面図など手法は未定で、どの場面で示すかも検討中ですが、できる限り多くの住民の目に触れるよう努めていく方針で、良い方法があれば提案願います。</p>
	<p>まだ漠然として見えにくいことが多い状況での意見収集であるが、町の方向性がある程度決まって、まだ変更の余地がある段階で、町民に向けた説明会で意見を反映させていただけるとよい。そしてできた施設を使いたい。</p> <p>「せんとぴゅあ」では意見反映の余地がない状態で説明会だった。実際に利用する人や図書館の専門の方の意見は全く反映されずに建物できた。非常に素敵な建物だが、図書館の機能として満たされない部分が大いまま建ってしまったように感じる。</p> <p>表面的なものはうまくっており、町内外からも評価されているが、新しい事業もどこに重点を置くのが難しい。</p>	<p>町のこれまでの施設整備において、すべての住民意見が反映されたわけではありませんが、運営段階で柔軟に対応しながら改善してきたという実績はあります。たとえば「せんとぴゅあ」では、当初の意図にすべて沿った形ではありませんが、結果として利用者が増え、施設として活用されています。必ずしも反映されるとは限らないかもしれませんが、ぜひ意見を出していただきたいと思います。</p> <p>また、タウンミーティングや懇談会など議論の土台づくりを進めながら、住民の声を吸い上げ、それをもとに今後の整備方針に反映させていくほか、地域コミュニティに対しても、要望があれば説明に出向くなど柔軟な対応をしていきます。</p>

	意見、質問等	町からの回答/今後の対応
対話の 時期	<p>町の方向性が見えず、もやもや感や不透明感が強いと、何をしているかわからず不信感につながり、損をしていると感じる。役場も情報不足や反発を避けたい意識は理解できるが、町民から見るとゼロベースで壮大な構想を示されても焦点が定まりにくい。基本的な構想や方向性を事前に提示すれば、町の考えが共有され、議論が深まるはずである。タウンミーティングも大枠だけでは議論の起点がつかみにくく、テーマ設定や出口を意識した段階的な進め方が望ましい。</p>	<p>行政が「こうします」と決めた形を提示することも技術的には可能ですが、そうした進め方が行政主導と捉えられ、かえって町民の信頼を損ねることにさらけかねないとの懸念があるため、現在のような段階的で丁寧なプロセスを選択しています。</p> <p>懇談会では、皆さんから多くのご意見をいただいたうえで、その内容を踏まえて町としての案を構築・提示する方法を探っています。この進め方は、最初からそうの方針として話し合ってきたものです。</p> <p>一方で、町民の皆さんから「情報が足りない」「わかりづらい」との声があることも十分に承知しています。町としても、何をどのタイミングでどのように伝えるかは大きな悩みであり、最も難しい課題だと認識しています。全てを一度に伝えるのではなく、必要な情報を適切な形で、町民に届くように工夫して伝えることが重要であると考えています。</p> <p>今回のレンガ倉庫の整備についても、町としての考えや構想をしっかりと伝えながら、皆さんと対話し、共に進めていきたいと考えています。</p>
	<p>タウンミーティングの第1回に参加し、「デザインミュージアム」に関する説明を聞いて非常にわかりやすく納得できたが、ミュージアムの具体的な内容についてさらに詳しく知りたい。今後も「デザインミュージアム」について議論する場が予定されているのか。</p>	<p>当初「家具デザインミュージアム」と呼ばれていた旧東川駅跡地の活用について、「旧東川駅跡再開発プロジェクト」へと名称を改めたのは、町民の皆様にも「あの場所全体をどうするか」を理解いただくためです。</p> <p>ミュージアムだけでなく、歴史や地域の文脈を踏まえて話を進めたいという考えからです。2年かけて基礎調査を行い、織田コレクションによる「デザインミュージアム」構想も含めて説明する形をとり、タウンミーティングを通じて理解が広がってきました。理解しようとする人が多く、肯定的な声が多くなり、否定的だった方々も次第に共感を寄せるようになったことは、大きな成果です。今後は、9～10月頃を目処に町民説明会を開き、ミュージアムの意義についても意見交換の場を設ける予定です。</p>
建築家の かかわり	<p>隈研吾氏など建築家と行政とのコミュニケーション改善について話があったが、町民からは建物ができた背景やプロセスが見えにくいという現状がある。住民にとっては、慣れ親しんだ場所に突然新しい建物ができ、驚きや戸惑いを感じるケースもある。</p> <p>「駅跡プロジェクト」については、今回のタウンミーティングを通じて公開しながら進める意思表示があったが、町民とも継続的にコミュニケーションを取るためのアップデート方法について伺いたい。</p>	<p>隈研吾氏との関係性について、東川町では今後さらに連携のあり方を見直し、町としての姿勢を明確にしていける必要があります。隈氏は世界的に著名な建築家でありながらも、フラットに人の意見を受け入れる柔軟性を持ち、東川町に対しては協力的な姿勢を見せてくれています。</p> <p>一部で、他自治体における隈建築のメンテナンス費用に関する報道が見られますが、それは管理を行ってこなかった側の問題も含まれており、建築そのものの責任とは限りません。私たちはそうした一面的な批判に流されることなく、隈氏や関係者と丁寧に対話を重ね、東川町独自の信頼関係を築きながら、持続可能な施設整備を進めていこうと考えています。</p>
	<p>田根氏や隈氏の名前が出ているが、建築家は既に決まっているのか。決定のタイミングや手順はどのように決まるのか。</p>	<p>基本構想において、建物のイメージ、懇談会で出た意見などをまとめる作業について、懇談会での意見などを踏まえた、建物や空間の構想に関しては、町民の皆さんにわかりやすく伝えるために、具体的なイメージが必要であり、基本調査に続いて隈氏に協力をいただくほか、今後は、建築家の田根剛氏にもご参加いただく方向で検討しています。</p> <p>現在はあくまで基本構想段階であり、基本計画や実施設計など、今後についてはまだ決定していません。最終的にどのような体制で設計・施工に進むか、例えば、地元設計会社を中心となり、隈氏や田根氏には助言的な立場で関与いただくといった方法も選択肢のひとつです。</p> <p>現在、隈氏、田根氏へは「基本構想の検討」で依頼しています。過去に詳細設計は旭川の設計事業者が担い、隈氏はアドバイザーとして関わった経緯もありますが、現段階では決まっておられません。</p>
	<p>駅跡再開発において、隈研吾事務所の展示施設案が取り入れられた経緯を知りたい。隈事務所からの要望なのか、それとも町からの提案なのか。現在の計画案に至るまでの経緯を伺いたい。</p>	<p>町と隈研吾氏との関係は、コロナ禍における働き方や暮らし方の見直しを背景に、隈氏自らが町に連絡を寄せたことから始まりました。都会の働き方に限界を感じた隈氏は、自然環境の整った東川町に事務所を構えたいとの意向を示し、町は地元家具産業等との連携のもと、複数の共同事業を提案しました。</p> <p>その中には、現在の「KAGUの家」の設置や、若手デザイナーを対象としたKAGUコンペの開催、隈氏デザインの椅子のふると納税返礼品化、さらにデザインミュージアムの連携でした。これらは隈氏は深く共感し、他の施設についても、完全にお金をかけて設計・詳細設計をお願いした施設はほとんどなく、「そろいろ」、「きとろん」については、デザイン意匠の部分のみをお願いした経緯があり、隈氏もほとんど金銭的なことを問題視せず、事業に協力いただいています。</p> <p>我々の町は困ったから隈氏に助けを求めたわけではなく、向こうから話が来たわけであり、世界的な建築家である隈氏に対して今まで少し遠慮がちであったが、先日来からしっかりと物を伝え、フラットな関係をさらに構築していくことを、隈氏にもその旨を理解いただいています。隈氏は、東川は素材、環境で勝負する町だと理解し、それに寄り添う姿勢で関わっていただいています。</p>
	<p>駅跡再開発の平面イメージの中にも隈研吾事務所の展示スペースがあり、建築のプロセスにも関わっていかれるという説明があるが、直接建物を設計するのではなく、例えば北海道の若手建築家向けに「KAGUデザインコンペ」のように、審査や実現のサポートをする役回りもありうるのか。</p> <p>これまでと違う建築の捉え方、隈研吾事務所との関わり方を検討されているのか、検討し得るものなのか伺いたい。</p>	<p>隈研吾氏は本事業にも関わっていただいているが、世界的な建築家である隈氏に一方的な環境づくりを依頼したわけではなく、フラットな関係で協力したいというのが隈氏の思いで、建築意匠についてもボランティアで協力をいただいています。最初は隈氏に対して少し遠慮もあったが、このプロジェクトのスタート時点からは遠慮することなく意見交換を行っています。</p> <p>また、隈氏の協力で実施している「東川町KAGUデザインコンペ」は、国内外の若手クリエイターに発表の場を提供し、旭川家具の職人による商品化にもつながっています。デザインとものづくりの振興を見据え、今後も町の魅力を高める取組を進めていきます。その中には、現在の「KAGUの家」の設置や、若手デザイナーを対象としたKAGUコンペの開催、隈氏デザインの椅子のふると納税返礼品化、さらにデザインミュージアムの連携でした。</p> <p>織田憲嗣氏の教子子でも世界的な建築デザイナーの田根剛氏は、東海大学旭川校卒業者でもあり、東川町の家具業界や建築業界で知らない人はいないほどで、織田コレクションを大事に考え、展示の仕方などのノウハウについても第一人者であることから、田根氏にも依頼し、隈氏と連携しながら進めていきたいと考えています。</p> <p>我々の町は困ったから隈氏に助けを求めたわけではなく、向こうから話が来たわけであり、世界的な建築家である隈氏に対して今まで少し遠慮がちであったが、先日来からしっかりと物を伝え、フラットな関係をさらに構築していくことを、隈氏にもその旨を理解いただいています。隈氏は東川は素材で勝負し、環境で勝負する町だと理解し、それに寄り添う姿勢で関わっていただいています。</p>
	<p>隈研吾事務所の案は、これまでの町との関わりを踏まえたものと理解している。これまで町民から寄せられた希望や要望の内容と、その要望等を踏まえての考えを伺いたい。</p>	<p>今回のプロジェクトに対しては、町民の皆さまから多様なご意見が寄せられています。「開発が進むことで、地域のバランスが崩れないか」、「にぎわい創出（オーバーツーリズム）による生活環境への影響」など、暮らしへの懸念が多く挙がりました。懇談会の開催について、意見反映の時間を確保するため、当初予定していた会議スケジュールを2カ月程度遅らせ、会議回数も増やす方向で検討しています。また、「どこまで決まっていって、どこが検討中なのか」、「町の考えをもっと明確に示してほしい」といった情報提供に関するご意見も多数いただきました。</p> <p>町としては、すでに決まっていると誤解を与えないことは避けたいと考えています。織田コレクションの収蔵場所の整備と活用については早急に対応が必要な課題と考えています。</p>
	<p>田根氏や織田コレクションにも理解のある方に関わっていただくことは素晴らしいことではあるが、東川町ぐらい進んでいる町が、まだ世界の著名な建築家を呼んでくるようなことが歯がゆく感じる。</p> <p>家具のように建築でも若手の建築家にもチャンスをつくる取組はできないのか。一方で田根氏と隈氏の兼ね合いの中で、若手建築家の支援ができる、東川らしい関わりを見つけていきたい。</p>	<p>我々の町は困ったから隈氏に助けを求めたわけではなく、コロナ禍を契機に隈氏の方から東川町への関わりを望まれ、町内に事務所を構えるに至りました。その後、様々な建築プロジェクトにおいて、隈氏や地元設計者・家具事業者と連携しながら、地域らしさを大切にしながら建築を進めてきました。</p> <p>例えば「KAGUの家」も、隈建築をそのまま再現するのではなく、町の設計担当や地元の職人との協働によって生まれたものであり、極端なデザインではなく地域に根ざした建物づくりを重視しています。今後も隈氏に全てを依頼するのではなく、世界的に著名な建築家・田根剛氏などの連携も視野に入れ、町の文化や背景に即した形で判断を進めていく方針です。</p>
	<p>プロジェクトの計画内容（何がどこまでできるのか）は理解できた。ただし、施設が完成するまで実際の様子を見ることはできない。</p> <p>残念ながら、今回の場に町議会議員が参加していない。町民の生の意見や多様な意見を議員にも直接共有してほしい。多くの町民は現職議員や議長を知らない状況にある。このような住民参加の場に議員も来て、顔を覚えてほしい。</p>	<p>今回のタウンミーティングには公務の関係で議員の参加はありませんでしたが、第1回目は5名の議員が参加されており、関心を持っていたいただいています。今回の内容についても、タウンミーティングの開催も含め、議員の皆さんにはより深い説明を行っています。</p> <p>また、6月30日に町内関係者や有識者など約30名の委員にご参加いただいた懇談会には、傍聴という形で参加いただいており、そこでのやり取りは直接耳にいただいています。タウンミーティングにおける意見等については、議会とも共有させていただきます。</p>

	意見、質問等	町からの回答/今後の対応
用地の確保	倉庫は農協の土地だが、それ以外の電気軌道の土地は町が購入したのか。	現在、旧東川駅跡地は東川町が借用し、引き続き使用を継続しています。現在は所有者である電気軌道の経営体制が変わり、ファンドが関与している状況ですが、町としては購入に向けた検討を進めています。 購入に至らなかった場合でも、引き続き使用を続けることは可能と考えています。
施設整備のスケジュール	清水氏が構築した貴重な歴史文化アーカイブを、郷土館リニューアルや今回の施設整備、天人峡の将来計画と連動して活用すべき。その活用を担う人材の確保が必要で、可能であれば学芸員を複数名配置したい。 今回のテーマが歴史文化の継承であるため、町民に限らず、教育、未来への展望という部分はやはり教育施設としてほしい。建物の一部を教育施設（小学校校舎、中学校分庁舎、研究教育施設など）として活用することも。 50億円規模の事業は一括で実施せず、3期程度に分け、1期終了後に人の流れをモニタリングして次の段階へ進めるべき。教育施設化には、文部科学省から学校運営費の50%補助を受けられるメリットがある。 教育委員会の関わりが非常に重要となるプロジェクトである。是非、教育委員、教育長も深く関わっていただきたい。	本プロジェクトにおいては、小中学校や高校、専門学校との連携を視野に入れた教育機能の整備を構想しています。子どもたちの学びや育成を中心に、東川町ならではの「ものづくり」や「文化」に触れる体験型の学習環境を提供することを目指しています。この場合は町内外を問わず、すべての人にとって学びのある場所となるよう設計され、東川の教育環境の強化にも寄与します。 財源面では、文教施設は補助金の補助率は2分の1ですが、基準額が決まっています、3分の1以下となることから、国の地方創生交付金等の活用を検討し、補助率約70%の確保を目指します。残りの30%はふるさと納税等で賄う構想であり、現実的な財源確保にも努めています。施設整備にあたっては、教育委員会との連携を深めつつ、町全体で取り組み体制を築いてまいります。
事業の期待効果	東川にはきれいな建物がたくさんありますが、子どもの居場所とお年寄りがもっと生き生きできる場所がコロボできる良い。 お年寄りがベンチに座って、子どもと一緒に遊べるような交流できる場があると良い。	子どもや高齢者の居場所づくりとして、町内の様々な場所に、それぞれの世代が安心して過ごせる居場所を整備していくことが、「東川町らしさ」の実現にもつながります。すでに「せんとびゅあ」などの施設は誰もが立ち寄れる場所として機能しており、一昨年10月にオープンした「そらいろ」は多世代交流の場として活用が進められています。 今後は、町民の皆さんの声を反映させながら、各施設のプログラムや事業内容を見直し、より良い運営を目指していきます。一方で、役場ロビーに設けたリモートワークスペースや、文化ギャラリーの居場所スペースは、現時点で十分な利用がされていないという課題もあり、多くの町民に利用されるような工夫を考えていきます。
	共生プラザ「そらいろ」で居宅介護支援事業所のケアマネジャーをしている。説明を聞いて、町民に情報が十分届いていないことを改めて感じた。特に、世代を超えた価値あるコレクションの理解を深めるために、子どもや親子向けのワークショップなど教育機会を増やしてほしい。ケアマネジャーの視点からはシニア世代の理解も重要である。特に東川駅跡に長く住むシニア層は新しい開発に否定的な考えもあり、プロジェクトを進めるうえで影響もあり、シニア層にもわかりやすい説明を行うことで理解も深まるのではないかな。 「そらいろ」は子供たちの放課後の居場所であり、お母さんたちの交流の場ともなっている。社会福祉協議会ではシニア向けの集まりが多いが、子どもと高齢者がそれぞれ集まっている印象がある。今回のプロジェクトで屋外の遊び場も設けてほしい。また、シニアセンターには子供も自然に関わる導線をつくっていただきたい。	高齢者支援や居場所づくりについてのご意見は、非常に共感できるものであり、町としても課題意識を持って取り組んでいます。「そらいろ」では、社会福祉協議会と連携しながら事業を進めています。現場には温度差もあり、改めて共有と見直しが必要です。 一方、東川国際文化福祉専門学校の「ふれあいの郷」では、誰でも来られる交流拠点として、新たにデイサービスの事業を開始しました。 学生にとっては学びの場、高齢者にとっては若い世代とのふれあいの場となり、来場者からも好評をいただいています。 このような取り組みを一つひとつ丁寧に進めながら、高齢者の居場所や遊び場づくりについても相談を重ね、より良い形を模索していきたいと考えています。
	8年前、息子の教育のため旭川から東川町へ移住。現在、息子は大学生として東京在住。息子世代では、現役合格した子たちが就活期を迎えている。北海道、特に東川町へ戻りたいという希望を持つ学生が多い。ホクリク奨学金で学んでいる学生も、町内に働く場がないのが課題。 「働く」と「暮らす」の魅力発信や地域ブランディングをどう進めるのか。若者の移住リターン促進について、この新施設を通じて何か計画や考えがあるのかを伺いたい。	東川町内には進学後の専門性を活かせる職場が十分とは言えず、これは小規模自治体に共通する課題です。しかし、東川町は子どもたちが夢に挑戦できる環境づくりを進めてきており、町で育った子どもたちが全国どこでも活躍することを応援する姿勢を大切にしています。 。将来的に郷土愛を持ち、東川町を応援してくれる存在になってくれることが最も望ましいと考えています。一方で、地元での就職を希望する若者のために、町内に働く場をどう生み出すかも重要な課題です。生活環境や地下水などの大切な資源を守ることが前提に、民間企業との連携や、クリエイティブ人材が町に拠点を置けるような支援を通じて、持続可能な働く場の創出を図っていきます。
	支援の必要のある方々や共生社会において、デザインの力は非常に大きい。肢体不自由や発達障害の子どもたちがデザインを通じて理解や生活の助けとなる事例がある。 視覚や聴覚障害者にも配慮したデザインは、学校教育や高齢者福祉、共生生活の中で実感される。家具コンペのような取り組みを、グループの中で実施することで、多様な世代や障害の有無に関わらず参加でき、デザイン体験を通じて東川に住んでいる良かったと感じ、生活の質を高めることができるのではないかな。 道路やゴミ捨て場の問題もデザインで改善可能で、機能美とともに住民や海外の方も参加しやすい。町全体をデザインによって体験し、それによって生活が少し豊かになる、「うちの町はデザインで」と外出先でも話せることがデザインの魅力と考えている。	デザインとは非常に幅広い概念であり、東川町では歴史的背景や多様な人々が集まること、産業においてもデザインの力を持っている。町には福祉専門学校や日本語学校も存在し、多様性や多文化の観点からも、全国的にも稀有だと思っています。こうした背景こそが東川らしさであり、それを十分に活かすことが重要です。 また、支援が必要な子どもたちへの支援が小学校などで増しており、これも東川が大切にしてきた価値を具体的に実践できたときに「本当の意味での東川」になると考えます。
	計画15ページの「道草館」からまち歩きストリートの構想について、計画にある「道草館」からまち歩きストリートのルートは、一軒家が多く魅力に欠ける。かなり距離があり歩くのは大変で、単に歩くだけでは退屈であり、飲食店やカフェなどの出店がなければ「まち歩き」として成立しない。 東川町の施設が点在する特徴を活かし、歩いて楽しいストリートづくりを検討する必要がある。	さまざまな可能性を踏まえて検討された案の一つで、将来的には商業施設の整備も視野に入る可能性があります。 また、一軒家など既存の住宅地の在り方も将来的に変化するかは不透明で、まちの将来像を柔軟に考慮しながら検討している段階です。
	駅前再開発は東川町の重要なフロンティアとして期待しており、約20年見守ってきた経緯から非常に楽しみにしている。町歩きの仕組みについては、道の駅から駅跡まで人を歩かせるコンセプトがあるが、その間にどのような工夫や仕掛けを設けて歩く魅力を高めるのか、再開発に伴う経済効果の見込みについても併せて伺いたい。 町歩きでは、単に点と点を結ぶだけではなく、途中に賑わいや寄り道できる楽しいスポットがあれば歩く意欲が生まれやすい。東京の表参道のように、道端に個性的な店や美術館など多様な楽しみがあることで人を引き付けている。東川でもそういった仕掛けづくりをどう考えている。	現時点で具体的な整備案はまだありませんが、点と点を結ぶように、小さな魅力が連なっていくご指摘は最もだと思います。 大きな施設を建てるのではなく、道の変化によって民間の商店やカフェが自然に生まれていくような動きや、歩きやすさと車の差別化、休憩スペースの設置など考えています。 地下水の町として、「水の町」を象徴する空間づくりも一案として考えており、今後も懇談会で検討を進めてまいります。
	ナイトエコミーについて、夜の時間にビールを飲むのであれば、ここで飲むことができと思う。バスで来て帰る方もいるだろうが、ジンやワイン、ビールがあるので、周辺に泊まる人が増えた方が良いと考えている。 駅跡に隣接するホテル計画についても、客室数や単価などが気になっている。ホテルじゃないと選択肢がないため、お客様が選べない、選ぶ楽しみがない。他にもこの辺に泊まる場所があるのか町中に泊まることも想定し、夜の経済活動から他の店舗にも人が流れる仕組みをどこまで考えているのか教えていただきたい。	近年、クラフトビールやクラフトジン、宿泊施設の整備が進んでおり、「夜の楽しみ方」についても新たな魅力が生まれつつあります。 現在、市街地や周辺地域では民泊施設の整備が進んでいますが、他の地域でも農家の空き宅地に設けられています。

	意見、質問等	町からの回答/今後の対応
事業の期待効果	行政は優れた提案を行っているが、課題は我々住民側にもあると感じている。各種会議には団体代表が出席しているが、個人的な意見だけでは将来の子どもたちへの継承には限界がある。過去は不足しているものを整備する段階だったが、現在はある程度整備が進み、各施設の価値や目的を明確化したうえで、本当に不足しているものを見極める必要がある。 価値創造役員としても、この課題に取り組むことが求められている。具体例として、織田コレクションが町の財産となったが展示場所がないことが課題であり、ミュージアム構想が浮上している。ただし、単にミュージアムを作るだけでなく、集客や町全体の流れを変える視点が重要であると考える。	町では、施策の背景や方向性について町民の皆様と広く共有し、意見交換を重ねながらまちづくりを進めたいと考えています。現在、タウンミーティングや地域団体からの声かけに応じた懇談の機会を設けており、今後も広く開催していく予定です。 懇談会には団体の代表者の方が参加されますが、その場だけで完結することなく、各団体内でも話題にしていただき、さらに多くの意見を集めていただけるようお願いしています。 まちづくりに関する基礎調査や課題の整理については、町ホームページに概要資料を公開しており、背景や意図を確認いただけるようにしています。今後も町民の皆様と丁寧に対話を重ね、共に持続可能な町の未来を考えていきたいと考えています。
	旧東川駅舎の開発が注目される一方、自身が第三地区へ移住して中心部と郡部の違いを強く感じている。開発がゴールではなく、文化や人との出会いのきっかけとなる場所が望ましい。松田与一記念館、第三地区の遊水公園など、遊水公園がある理由も農業を知る入口となり得る。 ランドスケープだけでなく、人との交流も重要であり、諸先輩方の経験から学ぶことは多い。語り部的な年配者の知見を若い世代に伝える仕組みなど、年配者を活かして地域全体、さらには飲食店などを通じて東川全体に波及する形となることが望ましいと考える。	町の特徴として、人口全体が約7000人から8700人へと拡大していますが、西部地区や中心市街地を中心に人口が増加しており、1・2・3小学校の学区においては大きな減少が見られず、地域ごとに人口を維持できていることが、東川町のまちづくりの成果の一つと言えます。 人口維持のためには、それぞれの地域に小学校を維持し、中心との関係性を考慮しながら、暮らしやすさや地域の魅力を創出し、暮らしと利便性を守るまちづくりが必要と考えます。
事業の財源	駅跡再開発には相当な開発資金がかかり、東川町がこの事業でどのように変化していくのかを注視している。補助金活用により町の直接的負担は少ないと聞けが、補助金も国民の財産であるため、有効かつ適切に使う必要がある。	東川町では、まちづくりを進める際に国の補助制度を最大限活用してきました。国の「地方創生2.0」の方針に基づき、地域振興のために国の補助金を最大限に活用しています。 補助金は税金ではあるものの、地域が主体的に活性化を図るための制度であり、町としては必要な事業を進める上で重要な財源と捉えています。国等の補助金と有利な起債（借入）を活用することで、実質的な町の負担は3分の1程度に抑えられます。 その負担分についてもあらかじめ計画的に備える取り組みを進めており、事業の実施前後で約3〜4年かけてふるさと納税などの基金を積み立て町の貯蓄などで計画的に準備しており、財政的にも見通しを持って事業に取り組んでいます。
	今年のふるさと納税の見込みが「？」と表記されているが、大丈夫なのか。 昨年よりも増えることを見込んでいるのだと推察するが、計画としては、ふるさと納税もプラスアルファで考えた事業となるのか。	令和7年度のふるさと納税寄附額は、5月末時点で約6億8,000万円、6月末時点で8億円を超え、例年の5〜6倍の早さで推移しています。通常、ふるさと納税は10〜12月に集中する傾向があることから、今後さらに増加する見込みですが、現時点では確定的な数字とは言えないため「？」として表記しています。 寄附額の増加は、町と農協が連携して「東川米」のブランド化に取り組み、農協から1,500トン（さらに10%上乗せ予定）の米の提供を受けていることが背景にあります。米の供給量に応じた寄附額が決まる側面があり、もし2,000トンに達すれば現在の寄附額を大きく上回る可能性があります。 ふるさと納税を恒久的な安定財源とは位置づけていませんが、今後数年間は制度の継続と一定の成果が期待されています。加えて、現在の全国的な米不足や価格高騰の影響もあり、今後も情勢を見極めながら、町と農協で協力して取り組みを進めていく方針です。
駐車場	旧東川駅跡の近くにある駐車場は何台を想定しているのか。 開発していく中で、観光客のレンタカー利用も鑑み、駐車スペースはかなり多く必要になると想定される。	図面で紫色に示された部分はイメージ段階であり、その下に位置するオレンジ色の開発エリアとの関係性も踏まえながら、これから検討を進めていきます。イベントなどで人が集まる際、どこに車を停めるかを事前に考え、必要なスペースを確保しておく必要があります。 また、「道草館」周辺にも新たに駐車場を増やす予定で、町としても用地の確保を始めています。また、「りしり」店の横には現在、砂利を敷いた簡易的なスペースがあり、既に駐車可能な状態になっているなど、市街地全体で段階的に駐車場を整備していくことを考えています。
	ウォーカブルな環境を目指す構想がある中で、施設隣接の大規模駐車場は必要ないと考え。バリアフリー車両用や業者用など、最低限の駐車スペースは設けるべきだが、多数の車が出入りする駐車場整備は検討いただきたい。 近隣住民の中には賑やかさへの懸念もあるため、地域住民への影響を十分に議論し配慮することが重要である。	駐車場については、限られた土地の中で最大限の利便性の確保と、現実的な駐車スペースを確保するため、町内市街地において分散的に配置することを基本としています。 今回示した案でも、空き地として活用可能な場所に、ある程度まとまった駐車スペースを設けることが可能であるという前提で配置を行いました。道の駅周辺についても、一部砂利を敷いて駐車スペースを増やすなどの対策を検討中です。 ただし、駐車場の整備は一時的な対応にとどまらず、市街地の賑わいや来訪者数の変化に応じて、検討すべき課題と認識しています。施設の運営費を確保するためには一定の集客が不可欠ですが、集客と地域住民の暮らしやすさとのバランスが崩れないよう配慮する必要がありますと考えています。 観光振興と生活環境の調和を図りながら、駐車場の在り方や施設整備の方向性についても、引き続き検討していきます。

旧東川駅跡再開発プロジェクト以外について

	意見、質問等	町からの回答/今後の対応
公共交通	乗り合いバスの停留所について、公共機関等の建物に隣接している停留所は良いが、住宅地にある停留所は日除けになるような屋根等がない。さらに今後は雨や雪の影響が考えられるが、何か対策を検討しているのか。	市街地では、定時定路線ではなく、予約に応じ運行時間を通知するバス運行方式を採用しています。利用者の長時間待ち時間を避ける仕組みとしています。バスの乗降ポイントすべてに屋根を設置することについては、設置場所の所有などの課題がありますが、それらを把握し解決できるか検討を行い、サービスを発展させていきます。
	予約制乗り合いバスについて、登下校の保証をしていただきたい。西部地区は路線バスと同じような運行となっているが、第1～3小学校は予約制で、予約された場所を順番に回ると説明があった。停まる回数が増えるほど時間もかかるため非常に不便に感じる。停車地のポイントを絞って、もう少し時間通りの登下校をしたい。日中は予約制として、予約のある御宅を回っていただけたら嬉しい。	町民の登下校の移動手段として導入している予約型乗合バスについて、町内各校で説明会を実施しました。特に、朝の時間帯の運行に関して多くの意見が寄せられ、これを受けて、朝8時台の便について、利用の有無にかかわらず利用見込者を対象に半年ごとの意向調査を行い、ポイント設定と路線の調整を行う方向で検討を進めています。午後の便については、学童保育や少年団活動の送迎に対応するため、14時台には「00分」「50分」、15時台には「50分」の増便を予定しています。こうした取り組みにより、より柔軟で利便性の高い交通サービスを提供し、特に児童生徒の登下校時に安心して利用いただけるサービスの確保に努めます。詳細は今後、保護者の皆様へ改めて案内させていただきます。
	予約制乗り合いバスの増便については、役場の出発の場所と時間は決まっているのか。学校と連携して、部活終わりの子供達がバスの時間に間に合うようにしていただきたい。また、旭川から高校生が入ってきて、町営バスの「道草館」での乗り継ぎがうまくいっていない時間帯がある。その辺りも路線バスとの乗り継ぎ運行をうまく考えていただきたい。	出発・到着の基準点として「道草館」を軸に時間設定を行っていますが、12時台から15時台については、小学校の下校時間を基に第1・第2・第3小学校からの出発を起点とし、児童生徒の下校を優先に対応します。一般の方もこの時間帯に予約利用可能です。バスの便数や時間帯は、旭川市や東神楽町から回ってくる既存の電気軌道バスとの接続を考慮し、「道草館」から電気軌道の便の接続は10～20程度の余裕を持たせた時間設定としています。今回の乗合バスは旭川電気軌道へ委託しており、既存の路線バスと乗合バスの接続、管理が同一担当者により行われていることから、路線バス側の調整も含めた連携が可能で、今後も、町民の声を反映しながら、実情に合った交通サービスの充実を図っていきます。
	第2小学校区では、今年秋からスクールバス、学童バス、予約制乗合バスが統合されると聞いているが、その理由や統合によるメリットが不明である。今後説明会は予定されているものの、参加者だけでなく地域の保護者全体に文章等で丁寧な説明を求めたい。予約制乗合バスはルートや時間が日々変わる可能性があり、子どもが安全に乗降できるか不安がある。これまでのスクールバスは学校や運転手が乗車確認を行い、保護者も安心して仕事に専念できる環境であったが、統合によって予約手続きや保護者の責任が増し、子どもがバス内でSOSを出しにくくなることや、乗降時間の把握が難しくなることを懸念している。利便性の高い東小地区への転居者が増え、第2小学校の児童数減少存続への影響も危惧している。バス待機時間中の見守りサービスは送り出しを行わない条件で運用されており、学校の終業時刻から出発までの約30分間、誰が乗車責任を負うのかが不明確である。特に時計を読めない1年生には大人のサポートが不可欠である。9月からの運用開始にあたり、混乱や戸惑いが予想されるため、子どもと保護者が安心できる体制整備、責任分担の明確化、フォア・窓口の設置と広く周知する対応を強く望む。	町が導入を進めている予約型の乗合バスは、交通サービスの効率化と向上を目的としており、決してサービスを低下させるものではありません。町内ではこれまで定時運行の町営バスやデマンドタクシーなど様々な交通手段が運用されてきましたが、利用状況やコスト面での課題もある中、全体を見直した結果、現在の予約制乗合バスの導入に至りました。運行は旭川電気軌道が担い、同社は既存の路線バスも運行しているため、担当者が同一で連携がやすく、町内外の移動がよりスムーズになることが期待されています。地域の交通体系を再構築するため、交通対策協議会で2年間にわたり検討が重ねられてきました。新たな交通サービスは、今後数年をかけて段階的に改善を進めていく予定であり、住民の皆さんの意見を受け止めながら、より良い移動環境を整備していく考えです。
	今、乗り合いバスの計画が進んでいるが、ライドシェアを東川町で採用することについての議論があったのかお聞きたい。	東川町では、現在「みまもりカー」をはじめとした地域交通の仕組みを実施しています。ライドシェアについては、国の動向や他自治体の事例を踏まえ、交通協議会にて慎重に検討してきました。その結果、現時点では導入の必要はないと判断し、現在の制度を継続しています。ただし、今後の制度改正や町の状況変化に応じて、導入の可能性も視野に入れつつ、引き続き情報収集と検討を進めてまいります。
	東川町のような規模の地域におけるライドシェアの導入についてですが、われわれの視点から見ると、このような規模ではどのように受け入れられるのかは少々不明である。町民の方々にとって実際にどのように感じられるのかについては、慎重に見極める必要があると考える。	ライドシェアは、一般住民が運転者として有償で運行に参加できる新たな交通手段であり、規制緩和により導入が可能となった仕組みです。一方で、実際の運用には法的・制度的な課題が多く、簡単には導入できないのが現実です。東川町では現在、各振興会が無償運行する「みまもりカー」によって、地域の足を支えています。これも無償であるからこそ成立しています。今後、民間の力も活用しながら有償運行を視野に入れた持続可能な交通体系を構築するため、ライドシェアの可能性についても慎重に検討を進めていく考えです。
	乗合バスでは最終便が20時となっており、試験運行していた22時台の便が含まれていない。試験運行がうまくいかなかったのか、あるいは運行が難しかったのか。週末（金土）だけでも22時最終便の運行はできなかったのか、その検討経緯を知りたい。夜間の外出、とくに飲食は第3地区全体の課題であり、高齢者の生きがいにもつながるほか、地域のカフェなどへの来客につながるれば商業活性化にも寄与する。乗合バスが難しい場合、みまもりカーの夜間運行が制度上可能か伺いたい。	新たに運行を予定している乗合バスについては、当初は運行時間をやや早めに終了する形でスタートします。すべてのニーズに完全対応することは難しいものの、今後、町民の皆さんの利用状況や意見を踏まえながら、運行内容の見直しや改善を図っていきたいと考えています。どの時間帯や曜日にとどれだけの利用ニーズがあるかを見極めることが課題となります。
市街地活性化	空港から東川町へ来る際の交通手段について、通常の空港連絡バスがなく、タクシー利用も事前予約ができないと聞かれた。空港に待機しているタクシーを直接拾う方法もあるかもしれないが、まだ試していない。過去には旭川市内から出発し東川へ入る形でしかタクシー利用ができなく、そのため空港から直接町へ来られるタクシーが増えることを望んでいる。	東川町では現在、旭川空港と町内をつなぐ交通手段の利便性向上について課題として捉え、改善に向けた検討を進めています。旭川電気軌道による「いで湯号」が旭川駅から道草館、旭岳方面まで1日3便運行されており、空港にも立ち寄るルートとなっていますが、便数が少なく利便性が十分とは言えません。特に、町民や観光・来訪者にとっては、空港から東川町へのスムーズな移動が難しいという声が上がっています。一方、タクシーの利用にも課題があります。空港がある東神楽町と東川町では、タクシー事業の営業区域が異なるため、柔軟な運行が難しくなっています。例えば、旭川から空港まで乗車してきたタクシーをそのまま東川町へ向かわせることは可能ですが、空港に常にタクシーがいるとは限らず、安定的な手段とは言えません。こうした現状を受けて、町としても強い懸念を持ち、早急な改善が必要と認識しています。町内のバス事業を担う旭川電気軌道との関係を生かし、空港と東川を直接つなぐ新たな運行ルートの可能性について、今後具体的な協議を進めていく意向です。すぐに解決できる課題ではありませんが、町民の皆さまや来訪者の利便性向上に向けて、公共交通のあり方を見直し、段階的に改善を図っていきます。
	みまもりカーの旭川方面への運行は、他地域でも難しいとされていると理解している。自身ゴドライバを手伝う中で、厚生病院や大学病院などへ体調不良時に直接行きたい場合でも利用できない現状がある。また、旭川市内の種苗園に買いに行きたいが、荷物が重いため結局地域の方の車に個別に頼むしかなく、これらの点について回答いただきたい。	みまもりカーは、地域住民が高齢者など生活の足を必要とする方々を無償で支援する目的で運行されており、一般向けに広域的な移動手段として利用することは難しいと考えます。特に旭川への移動については、旭川電気軌道による路線バスが担っており、今後は新たに導入する予約型乗合バスの運行も電気軌道に委託し、路線バスの改善や充実に向けて検討していく考えです。また、高齢者向けのハイヤー・助成制度も継続して実施しており、今後も多様な移動手段の確保に向け、検討を進めていきます。

	意見、質問等	町からの回答/今後の対応
市街地 活性化	東町1丁目と2丁目の坪単価が5～10万円と高めであるため、一定の財力がある人でなければ店舗出店が難しい現状にある。町のおもしろみや活気を生むには、若い世代が気軽に挑戦できる環境づくりが必要だと考えている。例えば、中古住宅を改装したベーグル屋のような例もあるが、資金が乏しい若者が新規参入しにくい状況は課題である。無償もしくは非常に低価格で住宅や店舗が取得できるような仕組みがあれば、挑戦的な若者たちが入りやすくなり、町に新たな魅力や多様性が生まれると思う。現状では資産を持つ層に限られており、結果として保守的・予測可能な展開に留まるため、そうした若者が入り込める「隙間」の創出を検討してほしい。	東川町の魅力が課題となり、民間による多様な動きが進んでいる一方で、土地価格の上昇や競争の激化により、新たに挑戦するにはハードルが高くなっているという課題も出てきています。民間の投資を歓迎しつつも、それだけに任せるのではなく、地域のバランスを保ち、誰もが挑戦できる環境を整えるため、一定の関与や支援を続けていくべきと考えています。自分のやりたいことを実現するだけでなく、時に「それで良いのか」という視点を町が提示することも、バランスを保つべきとも考えています。起業化支援制度を継続し、補助金を活用したチャレンジが近年増加するなど、今後も商店の立地など、地域住民が挑戦しやすい仕組みや場所の整備に取り組んでいきます。
	道草館は他の場所と比較して少々狭いのではないかと常々感じている。より大きな道の駅ができれば、東川を訪れた人々も喜ぶのではないかと考えている。これは自身の希望であり、すぐに実現可能な問題ではないと理解しているが、駐車場も整備された広い道の駅ができれば嬉しい。	道の駅に関して「施設が狭い」「居場所がない」といったご意見は、以前から町にも寄せられており、階段下のベンチも撤去され、バス待ちのスペースが不足していることへのご指摘を多くいただいています。こうした状況を踏まえ、駐車場の台数不足を解消するため、山田自動車跡地や道草館の裏側など複数の土地を取得し、一部では駐車場や自転車置き場の整備を実施しました。また砂利敷きの部分もありますが、駐車場を増やしました。また、道の駅の隣にある水色の壁の2階建て建物も町が取得済みで、この建物の1階部分をバスの待合所として整備する案を検討中です。10月1日から乗合バスが本格運行され、現在は道草館に入っているバスをその建物脇に回すことで、バス動線の集約と待機スペースの確保します。道の駅本体の増築は現実的に難しいため、道の駅内部の混雑緩和とともに、前面の空間を人が集まれるような公園的な広場として整備し、施設全体の魅力向上をめざします。
	町を歩いていると携帯を持ってさまよっている人をよく見かける。話を聞くと、喫茶店を探しているが見つからないとのことである。確かに建物の2階にあることもあり、観光客にとっては分かりづらいのかもしれない。このような観光客が多いと感じる。	観光客が町内の店舗情報を簡単に入手できるよう、観光協会などと連携してアプリの開発や情報提供体制の整備を進めていく必要があります。既に一部の仕組みは存在していますが、使いやすさや利便性の面で課題もあるため、改善が求められます。また、Googleマップなどのデジタル技術も進化しており、訪れる人々がそれらのツールを使いこなしている状況を踏まえ、進めていく必要があると考えます。
	町内を歩きやすくし、自転車道が整備されれば、第1～第3地区が自転車でつながり、中心部への人の流れが活性化すると期待される。自転車の乗り捨てが可能な仕組みがあれば観光客にも便利で、遠隔地のミュージアムや施設も連携できる。夏だけでなく冬季の利用方法も含めた全体的な交通回遊システムの構築ができれば、20年後、30年後には興味深い町になると考える。	観光協会が展開するレンタサイクル「コギコギ」は、指定されたターミナル間で乗り捨てが可能な利便性の高い仕組みで、現在は「きとろん」や道の駅、空港などにターミナルが設置されており、非常に優れた仕組みでありながら、利用の広がりには課題があります。過去には旭川市との連携も試みましたが、旭川側では1年で運用を中止するなど、現在も観光協会は試行錯誤を重ねており、こうした意見を今後の取組に反映していきたいと考えています。
土地利用	ニセコや富良野の例を踏まえ、東川町でも土地が外部資本（特に中国人）に買われないうちとの声が多い。「町を地域住民のために守る」こと、大きな土地を売却する際は町の許可が必要というガイドラインを以前から設けていると聞いている。今後もこの取り組みを継続してほしい。	東川町では、まちの秩序ある発展や環境保全に配慮しながら、多様な民間活動を受け入れる姿勢を大切にしています。ただし、民間の開発行為に対して行政が対応できる範囲には限界があることをご理解いただきたいと思います。一定規模以上の土地利用や建築行為については町の手続きにより調整が可能ですが、それ以外については制限が難しい現実があります。町としては外国人を排除するような考えではなく、多文化・多様性を尊重することを基本としています。その一方で、営利のみを目的とするような動きに対しては、行政だけでなく町民一人ひとりが関心を持ち、見守っていくことが重要です。住民と行政が共に目を向けていくことで、持続可能で調和のとれたまちづくりを進めていきたいと考えています。
	東川町に移住して行く方が多い理由の一つに「水」があると認識しており、東川町の大切な資源である土地、資源を守るための条例や法整備などの危機管理について町の考えを伺いたい。水資源の守り方や議会内容をより町民に分かりやすく伝えるために、YouTube等の動画配信などを活用し、学びの機会を増やす取り組みについても検討してほしい。ニセコ町のように外国資本による土地購入が無制限に行われ、東川町でも同様に地元住民が町の方向性をコントロールできなくなる事態を懸念している。	東川町は「地下水の町」として自然環境を守りながら暮らしを支えています。町では上水道整備を行わず、全戸で地下水を利用していますが、全戸の水質検査は5年に1度のサイクルで行っており、水質や水量については問題なく、良質な水が得られない地域には助成制度や共同供給施設を設けるなど、きめ細やかな対応を行っています。今後も水を守る仕組みや対策について、町民の皆さんにわかりやすく伝え、意見も反映しながら進めていきます。平成14年には「美しい東川の風景を守り育てる条例」を全国に先駆けて制定し、開発抑制や景観保全に取り組んできました。近年では太陽光パネル設置の増加を受け、景観と環境保全の両立を図るため、独自のガイドライン策定を進めています。今後は、資源や山林の保全にも視野を広げた包括的なガイドラインを早期に策定したいと考えています。土地売買や開発についても町独自の規制を設け、行政として事前確認を徹底しています。町民の皆さんにも監視の目としてご協力いただき、気になる点はぜひ役場まで情報をお寄せください。
高齢者 福祉	老人施設のことについても伺いたい。町外の人に、東川町にはこういう老人施設があると見えるような施設をつくってほしい。	町が運営する高齢者福祉サービスの一端として、「ふれあいの郷」に新たな通所介護の拠点を整備し、すでに運営が始まっています。この施設は、旧北工学園の校舎の一部ではなく、校舎反対側にある三角屋根が特徴の建物を活用しており、下階に食堂、上階に研修室がある構造です。民間のデイサービスセンター（西8号）の休止により、新たな代替機能が必要となったことを受け、町独自のサービスとして立ち上げられました。現在は徐々に利用者も増えており、スタッフの対応力や、福祉専門学校の学生と高齢者との関わりが良い効果を生んでいます。今後は、北工学園の改修や、学校施設との相乗効果を図ることで、福祉サービスの充実と学校の魅力向上を同時に目指していきます。
	自身も高齢になり、将来的に施設利用者になる可能性がある。その視点から見ると、老人施設は数はあるが良いところが少ないと感じる。子ども向けには幼児センターや保育所増設など移住者対応の努力が目立つ一方、高齢者向けには目に見える優れた取り組みが少ない。施設へのアクセスに困難を抱える人が多く、中心部に施設やスーパーを集約することが有効と考える。高齢者の一人暮らしが多い現状で、バスを導入しているのは理解できるが、予約制は戸惑いを招く。慣れの問題ではなく、総合的な対応が必要である。	町では、高齢者福祉の取り組みにおいて、施設の整備だけでなくサービスの質の向上を重視しています。たとえば、「そらいろ」では、高齢者が自分らしく長生きし、健康的な暮らしが送れるような支援事業を展開しています。また、高齢者の「居場所づくり」にも注力しており、福祉施設を単なるサービス提供の場としてではなく、交流や安心感のある空間として活用できるよう、工夫を凝らしています。これらの取り組みは、町民の多様な意見を聞きながら進めており、今後も必要とされるサービスや施設のあり方を見極めながら、柔軟に対応を続けていく方針です。

	意見、質問等	町からの回答/今後の対応
その他 公共施設	近年の東川町の変化に対し、町の考え方が分かりにくい。転居したところ町の様子が大きく変わり、道路や建物の整備によって景観や生活動線が都会のように感じられる。 現在、町民の半数以上が移住者とされているが、昔からの住民の意見も聞くべきで、農地の区割りや住民の質の変化の中でも変わらない点もある。 博物館や遊水公園、第三小学校など既存施設の維持管理が不十分と感じられる。遊水公園の東屋に向かって続く道が非常にきれいであったが、ここ数年は穴が空いていたり、通行止めになっていたりして、整備が全くされていないと感じる。北工学園近くのデイサービス計画があると聞いているが、建物老朽化し費用がかかると聞いている。また、以前は美しかった道路や郷土館が近年は劣化しており、それらを放置して新しいものをつくる、住民が希望している町はそのような町ではない。	東川町は移住者の増加が続き、現在では人口の55%以上が町外出身者となっています。宅地需要は高まり、販売開始と同時に完売する状況だが、農地を宅地に転用する考えはありません。 東川町の基幹産業である農業は、強い農業が保たれているからこそ美しい農村景観が維持され、素晴らしい風景が広がっている。家具産業も林業と製材業を含め、大きな産業として町民の約4割の人々が生活しているが、現状は厳しく、家具産業の振興も必要です。観光業も振興策が必要で、守るべきは守りつつ、経済を回し、町民が豊かになるためには少し攻める姿勢も必要です。 歴史を踏まえ、町民が誇りに思える場所を作り、織田コレクションを活用するなど、旧東川駅跡の再開発をしっかりと考えるべきで、決して暮らして壊す意図はなく、バランスを保ちつつ守ることが東川らしい持続可能な町を作ることにつながり、環境や景観、遊水公園などの既存施設の維持管理についても配慮し、大切にしていきたいと考えています。 郷土館については、現在は週に一回しか開催していない点も問題であると考えており、4月1日から地域おこし協力隊を1人採用するなど、残すべき貴重な建物として整備したいと考えています。
	演奏会や講演会を恒常的に開催できるような、椅子が常設された大きな建物がない。イベント時には毎回、参加者が椅子の設置や片付けを行っており手間がかかっている。 改善センターやせんとびゅあ、講堂などの施設はあるが、中心的な施設があれば、著名人を招いた講演会や音楽会など多彩な文化活動がより充実すると考えている。	文化ホールの整備については、東川町にすでに500人規模の集客が可能な「改善センター」や「せんとびゅあ」があり、固定席がなく多用途に活用できることが特徴です。 これまでの実績からも、大規模な専用ホールを新たに整備する必要性には疑問があり、むしろ汎用性のある空間を創出することの方が、東川町のまちづくりのスタイルに適していると考えています。文化ホール整備の議論は過去から存在しており、今後多様な意見を踏まえながら検討を継続していく必要があります。
	「そらいろ」のオープニングに参加。隈研吾氏のデザインで、照明が多く使われておりピカピカして良かったが、照明がLEDなのか。	当初はLED照明を採用していましたが、スマートフォンで撮影しようとするとうるまじいという問題があり、こどもらんど、活動ルーム、健康づくりルーム、相談室2、廊下など一部の空間は、照明を別のタイプに変更して改善を図っています。
	この町が「写真の町」であるということもあり、多くのカメラマンが居住している。自身が移住してから、せんとびゅあそらいろきょうなんなどの施設が整備されたが、施設設計段階で写真展示のイメージや設備（例：ピカチャーレール）など、写真の見せ方の考慮されるべきと考ええる。 町には長年関わるカメラマンや東京で活躍する人材もあり、写真の町として彼らと連携し、より効果的な展示方法を検討することが重要と考える。	「写真の町」としての東川町には多くの写真関係者が暮らし、文化施設の在り方についても、写真を活かす視点が必要です。 今後の施設整備においては、写真や文化財を効果的に活用し、魅力的に見せるための展示空間の在り方を慎重に検討していく必要があります。過去に「せんとびゅあ」を建設した際には一部の壁が展示できない仕上がりになっていた。写真を通じた発信の重要性を改めて感じた経緯もあり、写真が活き、発信できるよう取り組んでいます。
その他	2017年に旧小学校跡に設置された「チャレンジキッチン」で、味噌やトマトジュース作りを継続して実施してきた。これまでの指導者（地域おこし協力隊）が退任し、現在は責任者不在。農業振興課からは「自分たちでできるなら使用可」とされているが、機械の減価作業や清掃には危険を伴い不安がある。 地域おこし協力隊は任期3年で終了し、後任募集も応募がない。農業振興課も人手不足で対応が難しい状況なので、利用日だけでも責任者を配置してほしい。	チャレンジキッチンの指導者については、これまで担当していた地域おこし協力隊員が3年の任期満了となり、現在は振興公社に転籍しています。 新たな指導者については、協力隊員の募集を継続して行っていますが、まだ決定には至っていません。町では、関係課と連携しながら、次の指導者が見つかるまでの体制づくりについて検討していきます。
	中心市街地の話題とは別に、天人峡ホテル跡地の整備に強い関心を持っている。 天人峡から旭岳温泉までの登山道が廃道になっており、再開は非常に困難。登山道の管理は難しいが、この道は天人峡旭岳地区の歴史的に重要な道路である。整備計画があるなら、説明してほしい。	天人峡地域については、国や北海道、美瑛町、東川町など関係機関が連携して「魅力向上検討会議」を立ち上げ、地域全体の再整備に取り組んでいます。この会議を通じて、観光協会や関係団体とも情報を共有しながら、基本構想の策定を進めました。登山道の状況も踏まえ、旭岳との連携や周辺環境の改善、必要なアクティビティなどについても検討が進んでいます。 ただし、天人峡の整備は町単独で進められるのではなく、国や環境省、北海道との調整が必要であり、予算や省庁間の調整の課題もあります。たとえば、町として事業費を出したくても、管轄の違いにより調整が難しい場合もあります。 今後も国や関係機関と連携しながら、地域の魅力向上と整備に向けた取り組みを進めてまいります。
	株主の森周辺の道路で車の通行量が増加しており、冬季も含め通年開通しているため、バス、大型車両とのすれ違い時に危険を感じることがある。安全確保のため退避場を設けていただき、東3号の住宅出入口付近は視認性が悪いのでカーブミラーを設置いただきたい。 ごみステーションではライスレジン製ごみ袋導入後、燃えるごみと空き缶の袋を間違えて出す人が増え、ステーション内にごみが溜まり処理困難な状況。以前のように分かりやすい袋に戻すことを求めたい。	「株主の森」付近の退避場設置と、東3号地区におけるカーブミラーの設置については、町で検討を進めます。 また、ごみ袋にライスレジン素材が導入されたことにより識別がしづらくなったという課題については、町としても問題を認識しており、現在デザインの見直しを行い、新たなごみ袋の製作に向けて準備を進めています。
	「にしたんクリニック」との連携の進捗状況と、「日本一健康な町」について、具体的な内容を知りたい。みんながゲーム感覚で血圧測定ができ、インセンティブなどがあると良い。	今年2月に「にしたんクリニック」の西村社長と地方創生アドバイザーとしての連携を開始し、町民向け講演会も実施しました。西村社長には町を案内し、東川町の暮らしを大切にする姿勢をご理解いただいた上ででの連携です。健康に関心の高い西村社長ご夫妻に東川米を紹介したところ、SNS等で「ふるさと納税で東川米がもらえる」と発信され、25万回以上再生されるなど大きな反響があり、ふるさと納税の寄付額にも好影響が見られました。町の産業PRとして家具「工房宮地の椅子」をプレゼントし、椅子に座っていただき、素晴らしいを理解いただいたうえで、家具のPRを依頼する予定です。 健康まちづくりの一環として、R-bodyとの連携により高齢者の体調改善を目的としたプログラムも進行中で、将来的には医療費の削減にもつながると期待しており、名実ともに「日本一健康な町」を目指してまいります。
その他	まちづくり計画の進捗は毎年タウンミーティングで報告され、意見交換記録も残されているが、限られた時間の説明では十分に理解できない。進捗をより明確に把握できるよう、メール・広報誌・ホームページ等で資料を提供し、参加者が意見を返送できる仕組みを整備してほしい。	「まちづくり計画2024」は前年に策定され、2025年はその2年目にあたります。現在は新たな大きなトピックはないものの、計画に基づく取組は着実に進んでいます。 成果報告については、説明時間の制約から十分な説明が難しいことから、計画のローリング（見直し・更新）は2026年度に実施する方針であり、次のタウンミーティングで詳細な報告を行う予定です。
	併せて、「東川町まちづくりブック2024」49ページの「タウンミーティング開催の流れ」を公開してほしい。	